
いつわりの仮面（ペルソナ）

李氷 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルソナ
いつわりの仮面

【Nコード】

N2995N

【作者名】

李氷 仁

【あらすじ】

古の時代に『鬼』と呼ばれた一族と『神』と呼ばれた一族があった。人々は『鬼』を諸悪の元凶と忌避排斥し、『神』を己等が救世主と讃美崇拜した。そして対極をなす二つの運命は、遙かなる時を越えて再び交錯する。七つの秘宝をめぐり、今、『鬼』と『神』の因縁の戦いの火蓋が切って落とされる。***注）本作はリレ―小説形式をとっております。加えて更新はおそらく月一になると思われます。以上をご理解頂いた上で、気長にお付き合いいただければ光栄です。***

登場人物紹介（前書き）

作中に登場するキャラクターの簡単なプロフィールです。

ご参考までに……。

ストーリーが進んでいくにつれて、新キャラクターや紹介文内容も更新していきます。

登場人物紹介

南雲 椿 なぐも つばき

Age : 16 / Sex : 女

横浜市立高校に通う16歳の少女。それと同時に古の時代から存在する「神」の名を冠する一族の当主でもある。その儚い美しさと慈愛に満ちた優しさから「白の女神」の異名を持つ。

要 彰人 かなめ あきと

Age : 24 / Sex : 男

一族のまとめ役である24歳の男性。椿に最も信頼され頼られており、右腕的存在。老若男女関係なく親切に接し、日常では椿から兄のように慕われている。何かあれば椿といえど厳しく接するが、その優しさが隠し切れない。「聖者」の異名を持つ。

北斗 美夜 ほくと みや

Age : 18 / Sex : 女

18歳の女性。一族内で最も椿と年が近く、友達でもあり姉でもある存在、と慕われている。気性自体が姉御的なのか年上にも尊敬の念を送られる事が多い。その艶やかな美しさから椿が百合の花ならば彼女は薔薇だと言われ、「紅の女神」の異名を持つ。

花月 創太 かづき そうた

Age : 14 / Sex : 男

14歳の少年。あまり喋ることは無いが、時折見せる笑顔が愛らしい。年の割りに幼く見えることが多く、知らない人を見ると10

歳前後に思われてしまう。一族のマスコットの存在。
「天使の王子」の異名を持つ。

御舟 朔羅 みふね さくら

Age: 20 / Sex: 女

20歳の女性。おっとりとしていて、周囲を常時癒している。生まれつき病弱な為、普段は家に籠っており姿を見せることはごくわずか。一族内では母親的存在。
「癒しの母」の異名を持つ。

御舟 朔真 みふね さくま

Age: 20 / Sex: 男

20歳の男性。朔羅の双子の弟。

雪怜 せつれい

Age: ? / Sex: ?

椿の守護獣。小鳥の姿をしており、椿の事を「姫君」と呼び絶対の忠誠を誓っている。南雲家のマスコット的存在(?)

* * *

天城 飛鳥 あまぎ あすか

Age: ? / Sex: 男 / Code Name: レオ

天城家直系の嗣子で現在の当主。理知的で冷静沈着な性格で、口数は少なく、あまり表情も変えない。『鬼』に貶められた一族のため、七宝を手中に収めることを目論んでおり、斎以下四名に七宝回収を命じている。

陸上くがみ 斎いつき

Age : 19 / Sex : 男 / Code Name : ルー
プス

温厚で理性的ではあるが非常に自尊心が高く排他的。常に斜に構えているものの実際はかなり好戦的な性格をしている。表面はいいものの、その実皮肉屋で毒舌家、相当に狡猾で目的のためには手段を選ばない。人間世界を疎んじており、天城とは何かしらの因縁がある。風牙という守護獣を従えている。

城崎きのさき 花音かのん

Age : 17 / Sex : 女 / Code Name : ヴァ
ルペス

あまり感情を表に出さず、口数も少なく口調もややきつめ。だがその内には深い慈悲を秘めている。他人と関わることを極度に避ける嫌いがあり、特別な場合を除いては一切口を開かない。幼い頃より植物を非情に好んでいる。炎珠という守護獣を従える。

酒々井しすい 倅介こっすけ

Age : 21 / Sex : 男 / Code Name : ファ
ルコン

短気で攻撃的な性格で、言動も粗暴。直情型で気性が荒く、なにかにつけ他人と衝突する。斎とは幼馴染で、良くも悪くも気心の知

れた仲。身内に対しては意外に面倒見が良い。水羅という守護獣を従える。

秦野 涑 はだの さえ

Age : 15 / Sex : 女 / Code Name : サイ
ペント

明るく無邪気で人懐っこい性格。幼い風貌と背格好から小学生と間違えられることが多い。外見にそぐわずわりと人使いが荒い。市内の私立中学校に通っている。雷毘という守護獣を従え、雷を操る特殊能力を有している。

???

Age : ? / Sex : ?

飛鳥と行動を共にする黒猫。厳格な性格で使命感も強く、洞察力にも優れているが、わりと感情の起伏が激しい。

風牙 ふうが

Age : ? / Sex : ?

斎に仕える守護獣。銀色の大型犬の姿をしている。

炎珠 えんじゆ

Age : ? / Sex :

花音に仕える守護獣。檜皮色の小柄な狐の姿をしている。温厚で
理知的な性格。

水羅 すいら

A g e : ? / S e x :

倅介に仕える守護獣。普段は青い小鳥の姿をしているが、必要時には鷹ほどの大きさに巨大化する。上品で物腰も柔らかく、気性は至って穏やか。

雷毘 らいび

A g e : ? / S e x :

冴に仕える守護獣。黄金の蛇の姿をしており、その場に応じてその大きさを変化できる。気位が高く、他者を威圧する言動をとる。

第零章

『神』と『鬼』

其は他と異なる力を持ちし者達

『神』は聖なる力を以ってして 世界を支え護り

『鬼』は邪なる力を以ってして 世界を破滅へ導かんとす

『鬼』の狙いしは古の秘宝 世界を支配せしめらるる七つの宝

『神』もその者共を阻止すべく 宝を先に手中にせんと欲す

宝を巡り 相反する力を持ちし者達が交わりし時 いつわりの仮^{ベル}
面^{ソナ}その姿あらわさん

鍵となりしは仮面^{ベルソナ}なりて 仮面^{ベルソナ}の消え失せし時

世界は新たな姿へと生まれ変わらん

第壹章 南雲

草木が揺れる。小鳥はさえずり、朝露が葉を伝い音も無く地へと落ちた。穏やかな朝、優しい空気に包まれながら一日が始まるようにしている。

そんな中、柔らかな花の香りに包まれた部屋で少女は未だ眠りの中に身を沈めていた。

「椿、朝ですよ。起きて下さい」

「遅刻してしまいますよ」

障子ごしに少女を呼びかける声が響く。低く、穏やかな声が幾度と無く少女を呼びかけるが一向に彼女は目を覚まさない。

「彰人。アタシが起こすわ」

「ですが、美夜」

ハキハキとした女性の声と共に鋭い音を立て、障子が開かれた。

「椿！ いい加減に起きなさい！ 遅刻するわよ」

音に反応してか少女は、ゆっくりとその琥珀色の瞳を開けた。

「…美夜：姉さま？ 朝からそんなに怒らないでくださいませ。ご近所迷惑ですわ」

ふんわりとした笑顔で微笑む少女、椿。そんなのほほんとした言葉に美夜は顔を赤くした。

「アンタねえ…毎回起こす身にもなって見なさい！！！」

「美夜、落ち着いてください。椿も、きちんと自分で起きなくては駄目ですよ。南雲の当主がそれでは、他に示しが付きませんからね。ですが、ご近所の皆さんに対しての心遣いを指摘する事はとても良い事です」

怒鳴る美夜を宥めつつ、椿に注意する彰人であつたがどこか優しさを隠しきれないでいた。

「はい、彰人兄様。…でも、この呼び方だけはどんなに言われたつて変えませんかからね？」

「分かっていますよ。《白の女神》がこんなに頑固なんて、ご学友の皆さんが知られたら驚きますよ」

いたずらっぽく笑う彰人。そして椿の、絹糸のように柔らかな長い漆黒の髪を優しく撫でた。

「ひさびさに朔羅さくらが朝食を作ってくれましたよ。食べ損ねる前に仕度をするように」

「朔羅姉様が！？ すぐに行きますわ！！」

「すぐ来るのはいいけど、忘れ物するんじゃないよ」

癖のある肩までの黒髪をかきあげ、めんどくさそうに美夜は言った。

「分かっていますわ」

第壹章 南雲（後書き）

まだ、私の本当の舞台は始まっていない。

次に私が姿を現すとき、私の本当の舞台は開幕する。

次はわが片割れ、仁の舞台が幕を開ける。君の舞台を楽しみにしているよ仁。

李氷

第貳章 運命の胎動

温かく柔らかな光の中に小さな薄紅色が舞った。

眼下に広がる一面の早緑が静かに大きく波打つ。

見上げる先には澄み切った青蒼が果てなく続いている。

心地よい風に揺れる鈴なりの薄紅が、日の光を浴びて眩いばかりに輝いた。

穏やかな空間に鳥の歌声が響く。

……平穏なひととき。

突然、どこからともなく響いてきた凜とした鈴の音がそれを遮った。すると。

「戻ったか」

落ち着いた少年の声とともに障子戸が静かに開かれた。
年の頃は十五、六といったところだろうか。

黒一色に身を包んだその少年は後ろ手で障子を閉めると縁側に立ち、眼前に聳立する薄紅を見上げて言葉を投げる。

「何があつた」

《奴等が動き出した》

間髪あけず、少年の問に対する返答があつた。
だが、声の主の姿はどこにも認められない。

《いよいよ、戦いは避けられなくなる》

しかし少年はそれを意に介す素振りを見せず、やおら縁側に腰を下ろした。

「……そうか」

小さく呟いて、少年は口元に不適な笑みを浮かべた。
動揺するでもなく、焦燥を見せるでもなく、寧ろ満悦の表情を窺わせる少年に、叱責の色を含んだ言葉が飛んでくる。

《布陣に抜かりはなかるうな？ 間違っても奴等に遅れを取るようなことは許されんぞ》
「愚問だな」

向けられた非難を軽く受け流し、少年はただ一言そう短く言い放った。

しかし、少年を非難する声は尚も続く。

《だが全ての封印の在処を突き止めたわけではあるまい。その体たらくでなんとする》

声音こそ静かなままだが、そこからは明らかな苛立ちが感じられる。

「そう急くな。急いたところで、時が来なければ封印は開かない」

それを知ってか知らずか、並べられる小言に少年は余裕の体のまま鼻で笑った。

そして相変わらぬ抑揚に欠けた口調で続ける。

「既にファルコンとサーペントが動いている。明日にはループスも戻る。いつでも動けるようヴァルペスにも指示を出してある。……手筈は全て整っている。時さえ満ちれば、こちらの鍵は全て揃う」

少年の短く切られた漆黒の髪が風に靡く。

鮮やかな色が満ちるこの空間に、少年は明らかに異色だった。

《失敗は許されないことをよく肝に銘じておけ。……我々の目的を、ゆめ忘れるなよ》

一段と低く発せられたその言葉に、少年の放つ空気が変わった。口元からは笑みが消え、表情も険を帯びる。それまでの余裕は一瞬にして緊迫へと姿を変えた。

「……ああ、分かっている」

少年の漆黒の双眸に鋭い光が宿った。見るもの全てを射抜くかのような強い光。

「……天城あまぎの名にかけて……。お前もしくじるなよ」
《無論だ》

短い返答と共に、再び鈴の音が空気を振るわせた。その瞬間、淡い薄紅の中から黒い何かが躍り出た。ひらりと早緑の上に舞い降りたそれは 美しい漆黒の毛並みを持つ一匹の黒猫。

一陣の風が吹いた。
無数の小さな薄紅色が宙高く舞い上がる。

「……俺は必ず……」

言い差して、少年は天を仰ぎ見た。

少年の見つめる先で、小さな一羽の鳥が天高く飛び立った。

第参章 穢れ無き花

大地にまどろむ草木をば　はらいて残るは無なりて
大地にまどろむ草木をば　まもって残るは宝なり
大地をむしばむ草木をば　はらいて残るは毒なりて
大地をむしばむ草木をば　まもって残るは何とやらん

七宝秘伝唄より

冬の六花を思わせる色をその身に纏い金色を宿したそれは、今にも転落してしまいそうなほど疲労していた。普段、主の傍を離れずに行動していた事が裏目に出てしまったのだ。

身近で感じている力とは正反対の性質を持つ者、主の『敵』の力に当てられた故に起こった疲労。だが、ここで倒れるわけには行かなかった。一刻も早く主に伝えなくてはいけない事があったのだ。

<一刻も早く姫君に…！>

だが、体は悲鳴を上げ、思いも空しく大地へと徐々に降下していった。

<姫君…！！>

風が吹いた。意思を持ったかのような動きを見せるそれは、降下するモノの体を包み何処かへと移動させるかのように吹く。

<これは…彰人殿の>

「椿が心配していましたよ。雪怜^{せつれい}さん」

そのの呟きに男の声が返した。雪怜と呼ばれた小鳥は、小さく頭を下げる。

<面目無い…天城の力にあてられてしまった…>

「仕方が無いですよ。最近ずっと椿の傍にいましたから。だけれども収穫はあったようですね」

彰人の問いに雪怜は慎重に頷いた。

<…天城が動き始めた>

「！！　そうですか。では我々も」

<ああ。姫君が…悲しむな>

争いを嫌う心優しい少女。あの微笑みが翳ってしまうと思うと悲しかった。

「いつその事、我々だけで事を納められれば」

「それは、私が許しません」

彰人の言葉を遮るように、凜とした声が響いた。

<姫君>

「椿…」

驚く彰人達を脇目に椿は言葉を続ける。

「私は南雲家当主です。私が先代当主様方の護ってきた意思を受け継がなくてどうします。例え争いになってしまっても私はくじけませんわ」

背筋をピンと伸ばし、静かにけれど力強く言う姿は正に当主としての姿であった。

「出来る事ならば封印を解きたくは無かったのですが、仕方ありませんわね。兄様、いいえ彰人。唄の解析と場所の特定をお願いします。彼らよりも早く『宝』の保護をしなくては」

懷に持っていた古びた巻物を彰人へ差し出し椿は言った。

「…分かりました椿様。本日中に特定まで終わらせます」

*

次の日、椿は一人庭の大樹の傍にいた。

「…初代当主様。私たちを見守っていてくださいませ」

咲き誇る桜の大樹。南雲の初代当主が存命であった頃より存在するそれは、南雲一族のご神木である。優しく清浄な空気が周辺を覆い、悪しきものを決して寄り付かせはしない大樹。椿は当主になる以前から大樹の傍に行く事が多く、当主になってからは日に一度は必ず此処へ訪れ祈りを捧げていた。

「椿様。準備の方が整いました」

「分かりました。今行きますわ」

椿は髪を高く結い上げ、狩衣に酷似した桜色の衣装を纏うと、そつと立ち上がった。

*

人目から隠されて置かれた小さな祠。そこが、今回の封印場所の一つであった。椿が近寄り、懷に持っていた巻物を翳すと祠が歪み大きな鳥居へと変化した。

「本当に秘伝唄の書が封印場所の鍵となるなんて、考えても見ませんでした」

椿の持つ巻物。それは宝の在り処の唄が書かれた南雲家に伝わる巻物である。来る日がくれば使い方が分かると伝えられてきたそれは、封印場所の鍵となる役割を持っていたのだ。

今回、唄の解析により、比較的近く安全な場所に宝の一つが封印されているとこのことで彰人と椿だけでの回収となった。

「此処が、封印場所の一つなのですね」

「椿様。あちらを」

彰人が示した先には一本の老樹。その周辺には無法地帯と言わんばかりの草達が茂っている。草は所々黒ずんでおり異様な毒気を放っていた。

「これがまどろむ草木と蝕む草木……」

「まどろむ草木を護ることで宝が、蝕む草木を護ることで何か、おそらく宝自体の鍵が手に入ると解析しました」

椿の言葉に被せるように彰人は言った。

「鍵無くば、宝の封印は解かれないということですね。では、宝の鍵も手に入れないはいけませんわね」

「椿様。ですが、害のある草木を護るなどどうすれば。いつその事、草ごと蝕む毒を滅してしまえば」

彰人の言葉に椿はやりわりと首を振る。

「いいえ。滅することは私が許しません。たとえ他に害がある物でも護って差し上げなければ。害があるのならば、害を救ってあげれば良いのです」

椿は凜として言い、そつと地面に手を伸ばす。

「椿！ その力は！！」

「止めないで下さいませ彰人。今使わずとして何とするのです。…
せめてこの子達だけでも」

彰人の制止を振りほどき、椿は淡く微笑むと躊躇なくその手を地面へ付けた。

瞬く間に光が溢れ、辺りを包み込む。光の中心で椿は、悲しうに微笑んでいた。

「椿！！」

光が収まると同時に彰人は椿へ駆け寄った。応えるように笑みを浮かべた椿はゆっくりと瞳を閉じ、音もなく崩れ落ちた。それを彰人が支えると、か細い声で椿が言葉を発した。

「兄様…あと…は…頼みます」

それだけ言い、今度こそ意識を失った。

「力を使えばどうなるか分かっていただろうに。…起きたらお説教ですよ椿様」

衝撃が少ないよう慎重に抱きかかえると、彰人は椿の手元を見た。紅を中心に緋色・赤と同系色の花々がたおやかに咲き誇り、翡翠色の草がそれを支えている髪飾り。花の中心部には濁りの無い透き通った丸い水晶が静かに佇んでいた。枯れる事も散ることもなく千年もの長い間あり続けたそれは『穢れ無き花』と言われる七宝のひとつである。

「これで一つ、天城の手から宝が守れましたね。今はごゆるりとお眠りを」

先ほどまで椿がいたところを中心に、花が咲き誇り、草木は鮮やかに生い茂っていた。

第肆章 死魄の夢

南雲が封印を開いた

緊急用回線で送られてきたメールに記されていたのは、そのわず
か十文字足らずの一文だった。

*

腕時計の針が午後六時半を指した。

太陽が姿を消した空は、既に夕闇に蝕まれ始めていた。
じきに夜陰が訪れる。

僅かな光もない深淵の闇に、世界は包まれる。

新学期を間近に控えた清明の頃。

入国審査場には、長いフライトを終えた大勢の旅行客が列を成し
ていた。

時期が時期だけに、海外で春休みを謳歌したと思しき家族連れが
目立つ。

もはや原型をとどめていない大きな鞆を両手に抱える大人たち。
その側ではしゃぐ子供たち。

和やかな空気が溢れる空間。

その中に一人、周囲の空気に染まっていない青年がいた。
くせのない黒髪、飾り立てることなく、小ざっぱりと整えられた

身なり。手にしているのはパスポートと小さ目のセカンドバッグという身軽さ。

大人びて見えるが、おそらくは二十歳前後だろう。

一見すれば、至って普通の青年だ。

強いて言うならば、同年代に比べ質素にまとまり、それでいて容姿は目を見張るほどに整っていることくらいだろうか。

しかし今、その端麗な面差しには、何の表情もなかった。纏う空気に、彼の感情は微塵も感じられない。

だが、時折腕時計に向けられる彼の切れ長の瞳だけは違っていた。一点の曇りもない黒曜のその瞳には、まるで研ぎ澄まされた刃のような、凍てついた光が宿っていた。

全てを拒絶するような、全てを圧倒するような、えもいわれぬ威圧感があつた。

そして、その光は、見る者の本能に恐怖を与えた。

係官から声がかかった。

青年は無駄のない所作でブースへと進み出で、係官に手にしていた旅券を提示する。

提示されたパスポートの署名欄には、達筆な字体で『くがみつぎ陸上斎』と記されていた。

「どうも」

帰国の判を押された旅券を係官から受け取り、一言そう残すと、

青年 陸上斎は足早にその場を後にした。

その時、係官に向けられた瞳には、先ほどの冷たい光は微塵も宿ってはいなかった。

小さなブリーフケースとセカンドバッグを片手に到着ロビーに姿を現した斎は、しばし辺りを見渡した後、一人の少女を視界に留めた。

艶のある長い黒髪が印象的なその少女は、椅子に腰を下ろし、なにやら読み物にふけっている様子だった。

斎は少女に歩み寄ると、優しく声をかける。

「久しぶりだね、花音^{かのん}」

突如名を呼ばれ、少女は弾かれたように顔を上げた。
凜とした空気を纏いつつも、可憐さの漂う少女。

「斎……」

少女の澄んだ黒曜の瞳が目の前に立つ青年を映し出す。
実に半年以上ぶりの再会だった。

だが、それにもかかわらず、彼女の表情に目立った変化は見られなかった。

落ち着き大人びた中にもどこか幼さの残る面差しは美しく整ってはいるが、そこには全くと言っていいほど感情の色はない。

しかし斎はそれを意に介すことなく、申し訳なさそうに言葉を添えた。

「ごめん、大分待ったろ？」

何しろ到着予定時刻より二時間半以上も遅れているのだ。本来ならまだ陽のあるうちにこの地に降り立っているはずだったものを……。

「大丈夫。そんなに退屈しなかったから」

抑揚のない声音でそう返すと、花音と呼ばれた少女はやや表情を引き締めた。

「それより斎、奴等が一つ目の封印を」

「知ってるよ。サーペントからメールが来た」

皆まで聞かず、斎は少々うんざりした体で吐き捨てた。

「まったく、どこまでも邪魔をしてくれる連中だ。……でも、まあ」

斎はふと不適な笑みを浮かべた。

「奴等があくまで僕達に対抗して封印を解く腹積もりなら、それを利用するまでだ。泳がせておけば勝手に鍵を解読し、封印を開いてくれるだろう。面倒な作業は奴等にやらせておけばいいんだ。宝さえ手に入れば、手段はどうだっていい……」

黒曜の瞳が鋭く煌めいた。

「最後に宝を統べるのは僕達だ」

雲ひとつない空はすっかり闇色に染まっていた。その闇を照らす光を持たぬ天を一瞥し、斎は花音を振り返った。

「時間だ。行こうか、花音」

返事の変わりに小さく一つ頷き、花音は一足早く歩き出した斎の後を追う。

自家に代々口伝されてきた秘鍵の唄を、静かに紡ぎながら……。

泰平たいへいの微睡まどろみたるは 璽しるしの閨ねや
夜陰やいん天てんに渡りて 影かげを隠かくせし刻とき
虚空こくうに揺蕩たゆたふ御霊みたまの 夢見ゆめみし泰平たいへいなむ訪おとずれん

＊

車を走らせること約二時間半。更に車を降りてから歩くこと二十分。

都会の喧騒から離れた閑散とした雑木林。

鬱蒼と生い茂る草木を掻き分け、道なき道を進み、たどり着いたそこには古びた小さな祠があった。

相当に長い間風雨に晒されたと見えて全体的に痛んでいる上、端々は破損している。

供物の存在はおろか、もう長いこと人が訪れた痕跡もない。

忘れ去られたように放置されたそれは、遙か古の昔から、陸上の

嗣子が代々護り続けてきた厳秘の祠。

その前に立ち、斎と花音は僅か六十センチ四方の崩壊寸前の祠を見つめていた。

頭上には深淵の闇夜が広がっている。

冷たい夜風が二人の漆黒の髪を撫でた。

「はじめようか」

静かに言つて、斎は徐にその場に片膝を付き、静かに瞑目した。
斎より数歩下がった場所で、花音もまた彼に倣う。

沈黙が流れた。

そして。

「泰平の微睡みたるは璽の閨、夜陰天に渡りて影を隠せし刻、虚空に揺蕩ふ御霊の夢見し泰平なむ訪れん」

斎の口から静かに唱えられる陀羅尼^{だろに}。

それは、古の時代に封印されたという七つの宝　俗に『七宝』
と呼ばれた　その内の一つの封印を解くための鍵として、城崎家^{きのさき}
の嗣子にのみ口伝されてきたものである。

詠唱が終わると、突如、祠が仄白い光を帯び始めた。

その淡い光は瞬く間に五芒星を基調とした魔方陣を描いてゆく。
そして、魔方陣が完成するやいなや、目が眩むばかりの鮮烈な光が放たれた。

夜陰の空に一筋の閃光が立ち上る。同時に強風が吹き荒び、木々が大きく揺れた。

やがて光が収まると、一瞬にして一帯には再び闇が舞い戻る。その闇の中、淡く光る魔方阵の上に浮遊するものがあつた。

朱を帯びたそれは、一つの小さな勾玉。

その勾玉は、見れば、それ自体が仄かな光を放っている。

「これが『泰平の勾玉』……」

ややつて、斎は小さく呟くと、勾玉を手に取りつた。

それと同時に魔方阵は消え、辺りから一切の光が失せた。今しがたまで勾玉が纏っていた光も霧散する。

斎は手にしたそれを花音に手渡すと、古びた件の祠を見やつた。

「これで、この『八尺瓊やさかにの祠』は用済みだ。晴れて陸上ほくも、これを護る任から解放されるってわけだ」

言つて祠の裏手に回ると、そこに隠すように置かれていた香炉を取り上げる。

「もう、結界も必要ないだろう」

言つが早いか、斎は手にしたその香炉を躊躇いなく地面に叩きつけた。

やや鈍った音を立てて割れた香炉から、独特の香が漂う。香炉には目もくれず、斎は片の手で素早く印を切った。

「解」

低く一言放たれた真言。

直後、八方で硝子の割れるような音がした。その度に空気が振動する。

祠を護るため、斎がかねてより周辺に張り巡らせていた結界が消滅している音だ。

「……帰ろうか。報告が遅れると、またレオが煩いからね」

結界が全て消滅したことを気配で確認すると、斎はハンディライトを点けた。

今宵は新月。

ただでさえ薄暗い雑木林だというのに、月明かりもなくなれば、ライトなしには足元も覚束ない。

転倒して怪我でもしては一大事と、斎は花音の足取りに細心の注意を払いながら歩を進める。

今回は順調だった。

行く手を阻む雑草を押し分けながら、斎は安堵と落胆の入り混じった息をついた。

無事に一つ目の『宝』を回収出来たこと自体には文句はない。

しかしその反面、これだけ計画通りに事が運ぶと拍子抜けしてしまうのもまた事実。

こう言ってはなんだが、もう少し想定外の事態が起こってくれた方が楽しみ甲斐もあるというものだ。

南雲の妨害もなく、その他諸般の弊害もなかった。

強いて挙げるなら、帰国の便に不具合が生じてヒースローで二時間待たされた拳句フライトも三十分以上伸びたことくらいか。

尤も、『封印』の在処もその『鍵』も始めからこちらが手にしていたのだから、南雲に付け入る隙があるはずもなく、当然といえば当然なのだが。

その上、『鍵』の解読も容易なものだった。

この唄をきいたとき、この唄が示している『宝』が『泰平の勾玉』で、それが封印されているのが『八尺瓊の祠』であることはすぐに判った。

一つ目の一節で封印の在処を、二つ目で封印を開き得る刻を示しているのは一目瞭然だ。

本当に、こんなものでよく何世紀もの間封印が保たれてきたものだとは心底感心する。

だが一つ、理解しかねていたことがあった。

……最後のあの一節。

“虚空に揺蕩ふ御霊の 夢見し泰平なむ訪れん”

前段はおそらく死魄に死者の魂をかけているのだろう。

そして後段は、その魂が『泰平』を夢見ているのだという……。

(……馬鹿馬鹿しい)

斎は脳裏を支配する思考を払拭するかのごとく、内心で吐き捨てた。

死者の魂が泰平を望むだと？

(ふざけるな)

手に力が込もり、掴んだ梢が音を立てて折れた。

そんな綺麗事をよくも、さも真であるかのように詠えたものだ。
本当に死者の魂が『泰平』を望んでいると思っっているのだとしたら、この唄の作り主は、温室で綺麗なもののだけを与えられて育つたよほどの世間知らずか、或いは理想と現実の区別も付かないただの馬鹿かのどちらかだ。

魂とは換言すれば人間の残留思念とでも呼ぶべきものだ。
それが望むものが『泰平』だと？

(くだらない)

この穢れきつた世界は、どうにも上辺の美しさを好むらしい。
愚かな人間共は綺麗事を愛で、偽善を讃える。
実に軽薄で滑稽だ。

(ファルスだな)

軽蔑の色を隠しもせず、鼻で笑った。

人間が真に『泰平』を望むことなどありえないというのに、その魂が『泰平』を望むもののか。

(……今に分かるさ)

死魄が真に望むものが何であるのか、今に嫌でもはっきりする。
詠われた死魄の夢が虚構にすぎないということが。

「……何が『泰平』だ……」

暗闇の中に、斎の鋭い光を宿した黒曜の瞳は酷く冷冷と映えた。

真実^{こたえ}を覆い隠すかの如き闇を纏う死魄の空は、ただただ静かに世界をその腕にしかと抱いていた。

第肆章 死魄の夢（後書き）

今回作中で出しました封印を解く鍵の唄ですが、皆様にも是非“解読”に挑戦して頂きたく、今回はあえて文中で解読の類をすることを避けました。消化不良を起こした方がいらっしゃったら申し訳ありません。

ブログの方に“解読のヒント”を掲載致しますので、お付き合い頂ける方は一度足をお運び下さい。

尚、解説は一ヶ月経過の後に同ブログに掲載致します。

何卒ご理解の程宜しくお願い致します。

十二月吉日 仁

第伍章 誓いの指輪

鋭い光を宿した青年、感情の見えぬ少女。少女の胸元には一つの勾玉が…。

「あれは…『泰平の勾玉』…？」

光の加減で金色にも見える色素の薄い茶髪が揺らめく。淡い琥珀色の瞳がゆるりと開いた。

「…朔羅。…視えたの？」

声が聞こえた方を見れば、そこには幼い容姿をした少年が立っていた。

「創太^{そつた}。来てはいけないと言ったでしょう？ 風邪が移ってしまうわ」

困ったように言う朔羅に創太は、頬を膨らませる。

「だって…心配…僕…もう十四歳…大人」

柔らかな黒髪を撫でつけようと、更に言葉を続ける。

「天城は…何がしたいのだろう…」

その瞳には悲しみが浮かび、今にも泣いてしまいそうだった。

「私にも分からないわ。でも、きっと椿が悲しむ事よ」

椿は力の酷使により意識を失っていた。優しすぎるその心はいつも全てを救おうと必死であった。だが、天城の行いはいつも椿の願いを打ち砕いてしまう。

「姉^{ねえ}が…泣くのは…嫌」

「ええ。私も嫌よ。だから護らなくては」

一族最年少の創太は、椿を当主としてではなく『姉』のような存在として見、どんな時でもその姿勢を崩さなかった。だからこそ大切な『姉』が嘆く姿を見るのは辛かった。その為、椿の願いを護ろうと次の宝搜索に出ることにした。

「創太。外に赴けない私の分まで椿をよろしくね」

朔羅は体が丈夫ではない為、半年前まで山奥の屋敷で療養してい

た。今回、天城が動き出した事で無理を押し通して本家へ戻ってきたのだ。

「ん…次の宝は…僕と美夜」

「気をつけてね。怪我をしないように」

「…僕…強いよ？」

「それでもよ。美夜を護ってあげて」

一族中で母親的存在の朔羅。『癒しの母』の異名を持つ彼女はそつと、創太の頭を撫でた。

「ごめんなさいね。貴方のような子供まで狩り出してしまつて。どうか無事で」

「…ん」

創太はほにやりと笑みをこぼした。まさに『天使の王子』の異名を持つに相応しい表情であつた。

*

口に紅を指すと真紅の小袖を羽織り、その下にキャミソールとズボンを纏つた美夜はため息を零した。

「つたく椿つたら三週間は絶対安静だなんて、無茶すぎるなのよ」

「…心配」

若葉色の狩衣に似た衣装を纏い、創太は呟いた。そんな彼の頭を美夜は、ぐしゃぐしゃとかき回した。

「大丈夫よ！ 起きたら説教してやんなきゃ！！」

*

『空と大地に羽ばたくもの 藍と紅 重なりし時 誓いの印 現れん』

木々に囲まれた校舎。十数年前に廃校となつた、とある学校に隠されたように在つたのは一つの祠だつた。一見ただの祠のように見

える其処には常人の目には捉えられぬ泡のような膜が張られていた。
「ここが『約束の祠』よ」

美夜は祠を見つめ、一目した。そして口の紅を人差し指でそっと拭くと、躊躇う事無く祠の目の前の黒土へ鳥の絵を描いた。それを確認すると創太が小さく声を上げる。

「…雪怜」

夕日が落ち始めた瞬間、それは飛び立った。純白が夕焼けに染まり金色の瞳が光り輝く。黒土の鳥に雪怜の影が被さった瞬間、大地が静かに振動した。

「来たわね！ 創太、動くんじゃないわよ！！」

「…うい」

美夜は怒鳴るように言うのと右袖を捲く。腕には幾重にも布が巻かれており、その上に墨で2対の鳥が描かれていた。

「我は藍 空に羽ばたくもの 我が名は美夜 誓いを受け継ぎしもの」

言葉を紡ぎ終わると、美夜はそっと右手を地へつける。そしてゆっくりと目を閉じた。すると布に描かれた絵が命を吹き込まれたかのように動き出し、腕から手を伝い地に溶け込んだ。

「…祠が…」

祠の周囲に張られた膜が溶ける様に消え、扉がゆっくりと開く。

其処には仄かに光を放ちながら浮く小さな何かが在った。

白銀で作られた一对の指輪、指輪にはそれぞれ紅玉と蒼玉の石が嵌め込まれており、二つは白金の華奢な鎖で繋がっていた。輝きを損なう事無くあり続け、けっして離れる事なき誓いの印と詠われるそれは『誓いの指輪』と呼ばれており、代々美夜の家が守護してきた七宝の一つであった。

「椿がいれば、このまま持って帰れるんだけどね」

美夜はため息をもらした。『誓いの指輪』はある特定の人間にしか手にすることはおろかさわる事すら出来ない。守護してきた一族の者であってもそれは変わらない。その特定の人間の一人が椿であ

った。

「まあ、いいわ。創太、『箱』出して」

七宝を一時的に眠らせる事が出来る箱。それを使う事により、美夜達でも宝を手にすることが出来るのだ。

創太は背に背負っていたリュックを下ろし探ったのだが。

「……………」

「創太？」

「……………忘れた……………」

「……はあ！？」

美夜が覗き込んでみるが、リュックに入っているであろう『箱』の姿は見当たらない。つまりこのままでは宝を取ることが出来ないのだ。

「……っ、急いで戻るわよ！！」

美夜は怒鳴ると土に描いた鳥を消し、新たに結界を張る体制に入った。草木がざわめき、風が鳴る。音無く、新たな結界が張られた。それを確認すると二人はその場を後にした。背後で結界がひび割れた事に気付かずに……。

第伍章 誓いの指輪（後書き）

唄の解説は来月までお待ちください。

第陸章 大樹の芽吹き

廃屋の校舎が落日の光に照らされて赤く染まる。

その校舎を背に、二つの背中が森の中へと消えてゆく。

「まさか宝を置いて行ってくれるとはな。詰め甘い連中だぜ」

完全に視界から消えた頃を見計らったように、突如男の声がした。同時に、校舎の屋上に二つの人影が現れる。

一つは二十代前半と見て取れる、体躯の良い長身の青年のもの。もう一つは、小学生ほどの背丈のまだ幼さの残る少女のもの。

「ね？ 奴等をつけてきて正解だったでしょ、倅^{こっすけ}介君？」

少女はどこか自慢げに笑って見せる。

対して倅介と呼ばれた青年は不揃いな金髪を荒々しく掻き揚げ、やや不機嫌そうに「そーだな」と返す。

「さ、あいつらが戻ってくる前に早く回収しなきゃ」

フリルの付いたスカートを躍らせながら階段を駆け下りる少女。その姿は、まさに無邪気という言葉を体現しているかのようだ。

「^{さえ}冴！ はしゃいで転ぶんじゃないぞ！」

乱暴な口調ながらも、倅介は保護者のように声をかける。

下層から「だいじょーぶ！」と返ってくる快活な声をききながら、倅介も足早に階段を下りた。

校舎を出た二人は祠を一瞥した。

その周囲には先客なくもが施した結界が張り巡らされている。

「結界……ねえ？ ……ハッ、しゃらくせえ」

倅介が宙で印を切り、結界に触れた途端、結界は鈍い音を立てて呆気なく崩壊した。

「この程度の結界で俺たちを阻もうなんざ……馬鹿にしてんのか？」

阻むもののなくなった道を進み、倅介と冴は祠の前に立つ。

しかし、二人はそこに眠る『誓いの指輪』に手を伸ばそうとはしない。

七宝は、然るべき人間にしか触れることが許されない代物だ。

先の南雲の二人がこの宝に触れられなかったように、倅介と冴もまた、宝に直接触れることは叶わない。

それを克服するために、南雲は特殊な『箱』を使って七宝を眠らせ、一時的に宝に触れられる状態を作出しようとした。尤もそれは、肝心の『箱』の不在で失敗に終わったわけだが。

そして方法は違えども、倅介と冴もそれを克服する対処法を講じていた。

「水羅すいら！」

倅介が天に向かって声を上げる。

すると、周囲の森の中から一羽の鳥が飛来した。
全身に鮮やかな瑠璃色の羽毛を纏い、長い尾が特徴的な、品に溢れた美しい鳥だ。

その青い鳥は祠の前に降り立つと、小さな嘴で難なく指輪を銜えた。

《これで、二つ目の宝を回収できましたね》

女性の声がした。冴のものとは違う。穏やかで気品に満ちた女人の声。

《わたくしは先に屋敷に戻ります。当主様にご報告申し上げなければなりませんので》

「ああ。頼んだ」

倅介が視線を送る先で、水羅は指輪を銜えたまま天高く飛翔した。その姿を見送り、倅介は天に向け両手を伸ばす。

「さて、と。あとは『盾』の封印を解くだけ、なんだけどな……」

冴は倅介の言葉に頷き、天を見上げた。

沈む夕日が雲ひとつない空を赤く塗り替えてゆく。

「明日も、晴れだつて」

「この先一週間もな」

投げやりな様子の倅介に、冴は似つかわしくないため息をつく。

「やっぱり、明日やってみるしかないね」

言って、冴は何かを思い出したように倅介に呼びかける。
振り向いた倅介に、冴は有無を言わせぬ満面の笑顔で告げた。

「明日、十二時で終わりだから、迎えに来てね」

*

とある私立中学の校門前。

下校する生徒たちの中にざわめきが起こっていた。

生徒たちの視線の先には、大型のバイクに跨る一人の青年がいた。

紺のレザージャケットに黒のレザーパンツ。

さんばらの髪は金に染め上げられ、目元は黒のサングラスで完全に覆い隠されている。

首からは髑髏を模ったシルバーアクセサリーを下げ、腕や腰にも同様の装飾品をつけている。

かわりたくない世界の人間の臭いのする青年だ。

しかし当の本人は遠巻きに自分を見やる生徒の視線など意に介す様子もなく、携帯の画面を凝視している。

携帯の画面に映し出されているのは、一通のメールの文面だった。

若からの伝言。「早急に宝を回収しろ」以上

「……へーへー、分かってますよ」

追伸。無から有は生まれない。無い知恵絞るだけ労力と時間の浪費だ。くだらない意地を張らない方が身のためだと、一応念のため忠告しておくよ

「ッ、余計なお世話だよッ!!」

額に青筋を立て、おもわず携帯の画面に向かって吼える。
すると突然、携帯が振るえ、画面に着信の表示が現れた。

「おい、冴！ お前どこにいんだよ!？」

開口一番怒鳴りたてる。

だが通話先の相手はそれにも勝る怒鳴り声を上げた。

倅介君の馬鹿っ!! あれだけ目立たないようにしてって言ったのに! そんな目立つ格好で正門の前で陣取っててどうするの! ?
「……っんなこと言ったって、お前」
「……いいから、裏回って!」

予想外の気迫に若干及び腰になりつつも反論に転じようとする倅介を、冴は一言で遮ると一方的に通話を切る。

「……つつたく、俺をタクシー代わりに使っというて偉そうに……。迎えに来ていっていうからわざわざ来てやったのに、少しは感謝しろってんだ!」

愚痴をこぼしながらもエンジンをかけ、倅介は言われたとおりに

学校の裏手にバイクを回した。

＊

「で？ 本当にやるのか？」

車両の合間を縫うようにバイクを走らせながら、倅介は後ろに乗せた冴に投げかけた。

「やるしかないでしょ？ あたしたちに『指輪』を奪われて、いい加減南雲も動き出すだろうし……。いつまでも待つてられないもん」

冴は落ちないように倅介にしっかりとつかまりながら、しかし声音だけはきっぱりと言い切った。

だが一方の倅介は乗り気ではない様子でさらに問いかける。

「けど本当に上手くいくのかよ？」

「やってみなきゃわかんない！ でも何もしないでただ待つてるよりはマシでしょ！？」

「そうだけだよ……」

「男だったらグズグズ言わないの！ 分かったらさっさと急いで！」

倅介の視界に黄色を灯す信号が飛び込んできた。

突然加速するバイク。そのまま交差点に突っ込み、強引に右折する。

急の事態にバランスを崩し、危うく落下しそうになりながらもなんとか体勢を整えた冴は抗議の声を上げた。

「あぶないなっ！ もっと丁寧な運転してよ！ 落ちたらどーするのっ！？」

「あー、もううるせえ！！ 大体お前、今自分で急げっていったばっかじゃねーか！」

交通量の少ない道に差し掛かり、倅介は速度を大幅に上げる。

「それとこれとは話が別でしょ！？ 本当、デリカシーないんだから！」

「相変わらずちっせーくせに態度だけはデケーな！ あんまり騒ぐと放り出すぞ！」

「そんな言うほど小さくないよっ！」

「どー見たって小学生だろ？ この前だってお前、地下鉄子供料金で乗ってたじゃねーか」

取り留めのない舌戦は、目的地に着くまで延々と続けられた。

*

そこにあつたのは、大きく枝を広げ、見上げるほどの高さを誇る一本の大木だった。

注連縄の巻かれたそれは、大昔、七日七晩続いた大嵐の際に、避

雷針となり落雷から村を守ったと言い伝えられている御神木だ。

更に、なんでも、その時に落雷をその身に受けたにもかかわらず、以後現在に至るまで衰えることなくその形を保っているのだとか。

昔から『命の大樹』と呼ばれ大切に守られてきたこの御神木こそ、今回二人が目をつけている『宝』の封印場所だった。

冴は黄土色のブレザーを脱ぐとそれを倅介に押し付け、ブラウスの袖を捲り上げると大樹の前に立った。

「行くよ、雷毘！」

冴の呼び声に呼応したように、何処からともなく金色の大蛇が現れた。

全長はゆうに三メートルを越えようかというその大蛇は、緩慢な動きで頭をもたげる。

《手加減は必要ありませんわ。全力でやっておしまいなさい》

女性の声だ。気位の高そうな、きつい印象を与える声音。

「オーケー、雷毘」

隣に寄り添う大蛇にそう返す冴の表情にはもはやあどけなさはなく、まさに真剣そのものだった。

色素の薄い茶色の瞳には強い光が宿っている。

すると、冴の周囲で何かが弾ける音がした。それは一つではなく、幾つも重なるようにして徐々に大きくなってゆく。

風が唸った。冴のウェーブのかかった栗色の髪が不自然に踊りだ

す。

黄金の大蛇 雷毘の双眸が深紅に煌めいた。

「倅介君、さがっててよ！！」

冴は一言そう注意を呼びかけると、やおら右手を天に掲げた。

「言霊と共に鳴神が一つの命を奪う。祈りと共に奪われる命から、守りの証、目を覚ます」

次の瞬間、冴の周囲を激しい閃光が包み込んだ。同時に空気が破裂するかのような轟きが耳朵を打つ。

「召雷波しょうらいは！！」

冴の声が響いた。

直後、晴天の空に雷鳴が轟き、目の前の大樹に稲妻が落ちた。轟音とともに、狂ったように吹き荒れる風が土煙を巻き上げる。

やがて粉塵の中から姿を現した大樹は、無惨にも中央から左右に真っ二つに割れていた。

「……おい。少しは加減しろよ！ 周りの人間に気付かれたらどうするつもりだ、お前らは！？」

《お黙りなさい。わたくしがきちんとセーブしていますから問題ありませんわ！》

衣服についた砂埃を払いながら非難の声を上げる倅介だが、雷毘

が真っ向から反論する。

そのやりとりを後ろに聞きながら、冴は大樹の周りを一周する。

「……おかしいなあ。やっぱ自然の雷じゃなきゃダメなのかなあ？」

割れたこと以外に目立った変化のない大樹を見つめ、冴は落胆の声をもらした。

同様に倅介もため息を一つ付くと、胸ポケットから小さな紙切れを取り出した。

「……^{ミヤ}解釈は間違っちゃいねーはずなんだが……」

そこには、先ほど冴が唱えた唄と同じものが書き殴られていた。

この唄はもともと南雲の一族に伝えられてきたものだった。それを、倅介たちがうまく盗み出すことに成功したにすぎない。故に、ここに封じられているのが『盾』であるということ以外何も、『盾』の呼称すら、二人は知らない。

「やっぱ、南雲を縛りあげて吐かせた方が早いんじゃないか？」

うんざりした体でばやく倅介に、呆れ返った冴の聲が飛んでくる。

「倅介君、馬鹿？ 南雲が封印の解き方知ってたら、もうとっくに『宝』回収されてるよ」

その言い草に内心ムツとしながらも、正論を突かれて倅介は渋々引き下がる。

「……しょうがない。一旦帰ろう」

暫く大樹を凝視していた冴だが、やがて諦めたように立ち上がった。

「帰って斎君たちにも訊いてみたほうがよさそうだし」

「うえ、アイツに借りつくのかよ？」

冴の提案に心底嫌そうに返す倅介。

「そんなこと言っただって仕方ないでしょー？ 斎君が一番頭いいんだもん」

納得がいかない様子の倅介に「それとも倅介君、斎君に勝てる自信ある？」と冴は更に問いかける。

その間に、倅介は返事の代わりにヘルメットを投げた。

バイクのエンジンをかけながら、数時間前に送られてきたメールの内容を思い出し、倅介は憎憎しげに舌打ちした。

帰ったらきつと斎は、^{アイツ}ほら見ろといわんばかりの顔をするに違いない。

倅介の内心とは対照的に、晴れやかな空は遙かどこまでも澄み渡っていた。

第漆章 目覚め

星が煌めく夜、柔らかな灯が静かに揺らぐ部屋の中で彰人はそっとため息を洩らした。

「まさか『誓いの指輪』が奪われてしまうとは……」

美夜が結界の消滅に気付いたのは南雲の家に到着してから暫くの事、それまでは祠の放つ力と天城の放った力が混ざり合い気付かなかったのだ。

「……」

「美夜……」

青ざめる美夜を朔羅がそっと抱きしめる。『誓いの指輪』は美夜の一族が守護していた宝、それを天城に奪われたという事は彼女にとって最悪の事であった。

「……僕があの時『箱』を忘れなかったら……」

沈む創太、普段みせる笑顔など一切無くなった暗い表情で体を丸め部屋の端に座り込んでいた。

「んっ……」

その時、小さなうめき声が隣の部屋から聞こえた。

「椿！」

「兄様……？」

彰人が慌てて障子を開けると、暗がりの部屋の中椿が起き上がっていた。

「椿！」

「姉^{ねえ}！」

「椿！」

皆が立ち上がり、彼女の名を呼ぶ。それに答えるかのように椿は淡く微笑んだ。

「ごめんなさい。もう大丈夫ですわ」

「椿、良かった。……目覚めた矢先申し訳ありませんが、ご報告があ

ります。『誓いの指輪』が奪われました」

ほっとする彰人であつたが、次の瞬間には態度を一変させ、椿に先ほどの件を伝えた。

「申し訳ありません。結界の消滅にすぐ気付かなかつた私の責任です」

姿勢を正し、美夜は頭を下げた。それと同時に創太も頭を下げる。

「…ごめんなさい。…僕が『箱』を忘れたんです」

「そう…ですか」

椿は大きく息を吐くと美夜と創太を見つめた。

「二人とも怪我はありませんか？」

「大丈夫です」

「…ないです」

それを聞くと椿は、やんわりと微笑む。

「…ならいいですね。大丈夫、気にしないでくださいませ。…大丈夫」

その瞳からは、声からは、途方も無い悲しみが浮かんでいた。だが、それを隠すかのように椿は微笑んだ。

「ですが、奪われたのは事実。周りの者に示しがつきませんから、お二人には処分を下します。美夜、貴方には『聖者の懺悔』。創太には『鳥のさえずり』を。よろしいですね」

「はい」

「…はい」

二人はそれを聞くと部屋を後にした。

「朔羅。体調は大丈夫ですか？ もし平気なようでしたら、彰人と共に残りの七宝の解析をお願いいたします」

朔羅は静かに頷く。

「彰人、それと」

「椿様」

椿の言葉を遮り、彰人が言葉を発する。

「大丈夫です。まだ、挽回できます。だから、無理をしないでくだ

「さい」

彰人の言葉に椿は思わず顔を歪めた。だが、次の瞬間には表情を戻し、燐と背筋を伸ばす。

「私は南雲家の当主です。私が、無理をしなくてどうするのです。大丈夫、無茶はしませんわ」

その言葉に彰人は観念したかのように微笑み、席を後にした。

朔羅も退出し、椿が一人になった頃、彼女はそっと息を吐き人知れず涙を零した。

「あれだけは、奪われなくなかったのに……」

第捌章 波瀾の聲音

天城の家系は、遡れば平安時代の豪族に行き着く。

帝の覚えもめでたく、安定した地位を与えられ、名声をほしいままにしていた権力者であった。

華やかな平安の都で栄華を誇っていたかの家はしかし、ある時を堺として地に転落した。

没落した一族は都を追われ、あまつさえ表舞台からその存在を完全に抹消された。

しかし一族の血は絶えることなく、子々孫々後世に引き継がれていった。

天城はその末裔にあたるのだ。

……表向きには。

横浜郊外に門を構える天城邸は、遙か千数百年も前の館の造りをそのまま残している。

時代に合わせて多少修復改装こそされているものの、今でも門構えや屋敷の外観は日本古来の趣を呈している。

豪邸とはいいがたいが、なかなか敷地面積は広く、とても没落貴族の屋敷とは思えぬ代物だった。

そして今、この邸宅は七宝回収の行動の拠点となっていた。

*

《遅いですね、二人とも……》

心配そうな声音が頭上から降ってきた。

眺めやっていた花壇の花から目を外し、花音は声のした方に振り向く。

視界にとまったのは屋根瓦の上に停まる青い小鳥　水羅の姿だった。

《雷毘からの連絡もありませんし》

人語を話せるとはいえ、動物の姿をとる水羅には、感情を表情として表現することは出来ない。

だがこうして発せられる言葉からは、それが痛切に感じられる。

《何事もなければよいのですが……》

心根が優しく慈悲深い性分の水羅は、『盾』の回収に向かったきり音沙汰のない二人の身を心底案じているようだった。

「心配しすぎだ、水羅。大方、封印の解き方が分からなくて四苦八苦しってるんだろ」

そんな水羅に投げられた言葉は対照的に冷ややかなものだった。

「そのうち戻ってくるさ」

《ですが、斎様》

屋根から縁側に降り立った水羅は、開け放たれた障子の奥に向けて非難めいた声をあげた。

非難を向けられた当本人はといえば、障子の影でまるで関心がな
いと言わんばかりに悠然と畳の上に仰向けに転がっていた。

その視線は水羅に向けられることはなく、手にした洋書の横文字
をひたすら追っている。

事実、斎は二人の身の心配など微塵もしていなかった。

どうせ倅介が意固地になって無駄に足掻いているだけだ、という
のが斎の見解だ。

しかし水羅は気が気でない様子で右往左往している。

《やはり様子を見に行くべきでしょうか……》

《その必要はなさそうですよ》

誰にといつでもなく呟かれたその言葉に、穏やかな返答があった。

《どうやら、戻ってきたようです》

落ち着いた声音はまだ年若い青年のものだった。無論、斎のもの
ではない。

《本当ですか？》

水羅は嬉々として声の主の前に降り立った。

その声の主は小柄な体躯の狐だった。

美しい檜皮色の毛並みは光の加減で猩々緋に煌めいている。

炎珠^{えんじゆ}という名の、花音の守護獣だ。

《ええ。二人とも無事ですよ》

炎珠のその言葉に水羅の全身から安堵の色がにじむ。

そんな守護獣たちのやりとりに、斎は一瞥を投じた。

僅かほんの一瞬。その視線にはどこか、冷たい光が宿っていた。

だが次の瞬間には既にその光は消えうせ、斎は今までどおりに本に目を走らせる。

そんな斎の姿を目に留め、花音はその端麗な面差しに悲愴の色をのせた。

*

「随分と時間がかかったね」

襖戸を開くと同時に声がした。

その声に伴介は渋面を作る。

覚悟はしていても、やはり実際に耳にすると腹が立つ。

「うるせえ」

不機嫌そうに一言吐き捨て、伴介は部屋に足を踏み入れるなりその場にどかっとな腰を下ろした。

「で？ 件の『盾』は？ 見当たらないけど、どこにあるのかな？」

倅介の様子で、ことの方の経緯を悟った斎は、皮肉めいた口調で倅介に問いを投げかけた。

だからくだらない意地は張るなどあればと言ったのに、と斎の表情が物語っている。

あからさまに嘲笑を含んだその問いかけに倅介は反射的にかなりたてた。

「うるせーつつてんだろ！」

分かっているくせにあえて問うてくるといふ彼の根性の悪さに、倅介は舌打ちした。

倅介の中で沸々と怒りがこみ上げてくる。

「それがね、斎君」

不機嫌最高潮の倅介に代わって言葉を発したのは、遅れてやってきた冴だった。

「おかえり、冴」

冴の姿を認めると、斎はそれまでの人を食ったような表情を一変させた。発する言葉も幾分か穏やかなものになる。

それに対し冴は「ただいま」と明るく返したが、その明るさは一時のものだった。

明るさの消え失せた顔で、冴は申し訳なさそうに口を開いた。

「ごめんね、実は『盾』回収できなかったんだ……」

入り口付近に胡坐を掻いている倅介を邪魔そうにしながら部屋に入ってくると、冴は一枚の紙切れを斎に差し出した。

「これが『盾』の封印を解くための唄なんだけど……」

斎は手にしていた本を閉じると、やおら起き上がって紙切れを手にとった。

「さつき『命の大樹』にあたしの雷落としてみたんだけど、『盾』出てこなくて……」

冴から経緯の説明を聴きながらも、斎の視線は依然として、唄が記された紙切れに注がれている。

「本当に唄はこれで間違いないのか？」

隣に歩み寄ってきた花音に紙に記された唄を見せながら、斎は視線を倅介に向けた。

その表情には、先ほど倅介に向けていたようなからかいの色は微塵もない。

「ああ」

ぶつきらばうな物言いだったが、斎はそれを意に介す素振りもなく再び紙切れに視線を戻した。

“言霊と共に 鳴神が一つの命を奪う 祈りと共に奪われる命から

守りの証 目を覚ます”

おそらく冴の解釈は間違っ^よてはいない。

『言霊』とはこの唄のこと。

『鳴神』は神鳴り即ち雷のこと。

そして『奪われる命』というのは『命の大樹』を指し、更にそれが封印場所であることを意味している。

ならば何故、封印が解かれなかった？

『祈り』が重要なファクターなのか。

或いは、何かミスリードに引っかかっているのか。

はたまた、封印を護るために何か特別な術でも施されていたのか。

真剣な面持ちで考えに耽る斎を不機嫌そうに眺めていた倅介は、ふと彼の手元に目を留めた。

「おい、斎。何でお前がそれつけてんだ」

唐突な倅介の問に、斎は何のことかと一瞬怪訝そうな表情を見せた。

だが自らの手元に目をやるとすぐに合点がいった様子で、斎は左手を軽く持ち上げた。

「これことかな？」

その手首には細いシルバーチェーンが巻かれていた。

そしてそのチェーンには二つの銀細工の指輪が通されており、そ

の指輪にはそれぞれ紅と蒼の石が嵌め込まれている。

更に二つの指輪は白金の鎖でしっかりと繋がれていた。

その指輪は紛れもなく、昨日倅介と冴が回収した『誓いの指輪』であつた。

あれは水羅が天城家当主のもとに持ち帰つたはずだ。斎が持つているはずがない。

倅介の思考を読み取つたかのように、斎は薄く微笑する。

「本星以外の宝は自分で管理する気がないらしいよ、我等の若様は」「はあ？」

訳が分からないといった体の倅介を、斎は面白そうに眺めやる。

「要するに、リスクの分散さ」

一息置いて、斎は滔々と続けた。

「本来なら回収した宝は本殿に安置するのが筋だ。その場合、襲撃に備え結界を張ることになる。だが、もしその結界が破られてしまつたら、宝を一度に全て失うことになる」

無論、徒人に結界が破られることはない。ある程度の術者であっても撃退は可能だろう。

だが、相手が南雲の当主ともなれば話は別だ。

南雲当主の力の前には、結界などという小細工は不落の砦とはなれないのだ。

「だが、こうして各々が身に付けていれば、宝を奪うためには否が

応でも実力行使で勝負を挑むしかなくなる。仮に、結果として一人が討ち負けたとしても、奪われる宝は一つで済む」

だから『誓いの指輪』は斎が、『泰平の勾玉』は花音が身に付けているのだ。

ちなみに。斎が『誓いの指輪』をあえてブレスレット形式にして身に付けているのは、指輪同士を繋いでいる白金の鎖をどうやっても断ち切ることが出来なかったためである。

「それくらい、君にだって分かるだろ？」

言外に、いくら馬鹿なお前でも、と言われているのを感じ取り、倅介は露骨に不快感を顕わにした。

確かに理には適っている。

大切なものは見つからないように結界かくしておくというのが定石のように考えられているが、実はそれはハイリスクと背中合わせの行為。

逆に、常に身に付けて持ち歩くなど一見無用心なように映るかもしれないが、かえってその方が安全だ、というわけだ。

理屈は分かる。それは解るが……。

それは一方で、宝を身に着けている人間の身に迫る危険リスクを高めることになるのだ。

まったく、我等が主も随分と酷な真似をするものだ……。

倅介の顔に微かに暗い影が宿った。

そんな倅介をよそに、再び解読に意識を戻していた斎はやがて小さくひとつ息をついた。

「ここで考えていても埒が明かない。とりあえず現物を見よう」

実際にその場に立って触れれば、何か感じるものがあるかもしれない。

言って斎は立ち上がった。

やはり先入観を除いても、ミスリードの線はなさそうだ。

また、斎の知る限り、『祈り』に相当するような要素は天城には伝わっていない。

ならば考えられるのは、それは、南雲にのみ伝えられているものであるか、或いは、元より確立された特定の要素を示しているものではないかのどちらかだ。

もし前者である場合、自分たちに南雲に太刀打ちする術はなく非常に厄介なことになる。

いずれにせよ、いくらここで考えをめぐらせたところで判断することは不可能だ。

更に、特殊な封印法が用いられたという可能性が残るが、その存否もここで判ずることはできない。

要するに、実際に現物を見ないことにはろくに分析も出来ない状況なのだ。

手立てを講じようにも、あまりに情報が少なすぎる。
ただでさえ、初見で唄の解読をしようなどという無謀極まりない

ことをしているのだ。

足りない情報の中このままいくら考えていたところで答えなど得られようはなかった。

コートに袖を通した斎は、そこでふとひとつの事柄に思い当たった。

「冴。雷を落としてからどれくらいその場にいた？」

「え……？ どれくらいって……」

思いもかけない突然の問に、冴は面食らった様子で首をひねった。

「多分、数分……五分もいなかったんじゃないかな？」

その返答に、斎は何かに思い当たったように表情を変えた。

「覚醒の時間……」

「斎君？」

訝るような視線を送ってくる三人に、斎は早口に捲くし立てた。

「七宝の覚醒はそれぞれ一定の時間を要する。この『勾玉』のようにはほとんど時間をかけずに封印が解かれるものもあれば、ものによつては数時間近くの時間を必要とするものもある。……おそらく、『盾』は後者だ」

……失態だった。

唄の解釈に気を取られすぎたあまり、初歩的なことを完全に失念していた。

「……つてことは」

倅介の顔から色が失せる。

「もう『盾』の封印は解かれてあそこにあるってことか……!?」

「断言は出来ないが、可能性はゼロじゃない」

ややぶつきらぼくに言い放った斎の言葉を受け、倅介は感情的に声を荒げた。

「おい、雷毘!! てめえ何でそのこと言わなかった!？」

倅介の視線は、縁側に控える一尺足らずの金色の蛇を射止めている。

《責任転嫁しないでくださる?》

突然怒りの矛先を向けられ、責任を糾された雷毘は心外そうに反論した。

《そもそも、自力で封印を解くと息巻いて、助言するなと厳命したのは貴方じゃなくて?》

「必要最低限の知識は与えるだろ、普通!？」

「ちよつと、二人とも! ここで喧嘩したつてしょうがないでしょ!」

睨みあふ倅介と雷毘を見かねて、冴は二人の間に割つてはいる。その様子を横目で見やり、そんなことしてる余裕がどこにある、と嘆息すると、斎は「どうでもいいが」と呼びかける。

「結界はちゃんと張ってきてあるんだろうね？」

あくまでも確認の意味合いで発した言葉だった。完全には言わないまでも、ある程度南雲を足止めできる程度の結界を張っただろうな、ということの確認だった。

しかし、その直後、二人と一匹の動きが止まった。しばしの沈黙。

「……おい、まさか……」

斎の顔からさっと血の気が引いた。

「お前、張ったか？」

「倅介君こそ……」

《わ、わたくしには結界を張る力などありませんから、関係ありませんわよ？》

失態では済まされない事態に、蒼白な面持ちで互いの顔を見合わせる二人と一匹。

問い質さずとも、それが意味しているところは明確だった。

風が唸る。斎のまとう空気が変わった。

舌打ちと同時に「馬鹿が」と小さく吐き捨て、斎は庭に向かって声をあげる。

「水羅！」

一連のやりとりから全てを諒解した水羅は宙に舞い上がった。すると小さかった体軀は見る間に巨大化し、鮮やかだった瑠璃色

の毛並みも深い紺色へと変化する。

鷹ほどの大きさへと変貌を遂げた水羅はそのまま天高く上昇し、一瞬の間に目的地へ向け滑空した。

「何してる！？ お前たちも早く行け！」

斎の叱責に、固まったままだった二人は我に返ったように慌てて入り口へと走り出す。

その様子を厳しい目つきで見送り、花音にも先に行くよう促した後、斎は残る守護獣に向いた。

「炎珠、お前はここに残れ」

《御意》

斎の指示を受け、檜皮色の狐は身を翻し、縁側から姿を消す。それを確認すると、斎は誰もいなくなった庭先に向かって己が守護獣の名を呼んだ。

「風牙^{ふうが}！」

するとどこからともなく灰白色の毛並みが庭先に躍り出た。

無駄なく引き締まった体躯。精悍な顔立ち。光を受けて銀色に輝く毛並みを纏った大柄な犬。

「お前は水羅に続け。万が一邪魔が入るようならば」

一旦言葉を切った後、斎は今までにないほど冷厳に命を下した。

「手段は問わない。排除しろ」

主の命に風牙は無言の了承を示し、地を蹴った。
若草色が広がる庭先に銀色の閃光が走る。
瞬く間に風牙の姿は消え去った。

一通りの指示を出し終えた斎は、そこで冷淡な表情の中に不適な笑みを浮かべた。

「お手並み拝見といこうか……」

現状は自分たちにとって非常に分が悪い。

ここで南雲に『盾』を奪われようものなら、かなりの痛手になる。

それでも、今彼の胸中を占めているのは、危機感でも焦燥感でもなく、狂気に塗れた愉悦感だった。

「少しは楽しくなってきたな……」

僕の期待を裏切らないでくれよ……。

内心でそう呟き、斎は足早に部屋を後にした。

温かい日差しの中、部屋を吹き抜ける風は異様なほど冷たかった。

第玖章 生命の盾

『姫君、盾の封印予想地で不自然な落雷があつたとの報告が』

雪怜は椿の目の前に降り立ち告げた。

「そうですか。…何時ごろですか？」

『二時間ほど前です』

それを聞くと椿は、一息吐き立ち上がった。

「雪怜、朔羅と彰人を呼んでくださいませ。私は、『永遠の命』を取りに行つてきます。…『盾』は渡しません」

その瞳に迷いは無かった。

『盾』の出現には数時間を要する

その事実を知るものは幾人が存在する。だが、唄に出てくる「祈り」が何であるか知る者は南雲の中でも極わずかで、現在では椿の他に朔羅しか知る者はいなかった。

椿に呼び出された朔羅と彰人は簡略に報告を受けると、すぐに仕度を始めた。朔羅は椿の仕度を手伝いながら念を押すかのように彼女に告げた。

「分かつていると思いますが、『命の大樹』が芽吹いたら絶対に『永遠の命』を翳すのですよ」

「分かつていますわ。朔羅、そろそろ朔真さくまが戻ってくる頃です。戻り次第、全て彼に任せてお休みくださいませ。…体調、本当は悪いのでしょうか？ 無理させてごめんなさい姉様」

椿は朔羅の手を頬に当て言う。その手はひどく熱を帯びていた。

「…気付かれてしまっていましたか。そうですね、朔真が戻ってくるのなら、あの子に任せます。椿、すみません」

朔羅はゆるりと微笑むと、そつと椿の頬から手を外す。

「いいえ、体が弱いのに無理を言った私が悪いのです。朔真お兄様

に怒られてしまいますわ」

その言葉に朔羅は困ったように笑う。

「椿、怒られるのは貴方ではなく私の方ですよ。弟は貴方が大好きですもの。ケホッ」

「堰が！！ 姉様もう横になってくださいませ。私はもう行きますから」

朔羅から発せられた堰を聞き、椿は慌てて仕度を終え、外へ出た。
「いつてらっしやい。椿」

夕刻が近づく頃、椿と彰人は『命の大樹』の元へ駆けつけた。

「天城の一味と鉢合わせた場合、最悪戦うこととなります。…それでも行きますか？」

彰人の問いかけに椿は淡く微笑んだ。

「ええ、そうなった時こそ私がいなくて如何しますの？ 覚悟は出来ております」

神経を尖らせ、慎重に『大樹』の元へ向かう二人。汗が静かに頬を伝う。しばらくすると、『大樹』の姿がはつきりと見えるところまで近づいた。そこには、誰の姿も見当たらない。

「…結界なども張られていないようですね」

周囲を見渡し、彰人は椿に伝えた。

「どうやら彼らは『盾』の出現条件を知らなかったようですわ」

真つ二つに左右に裂けた御神木。その中心からはわずかな光が零れ始めている。

「そろそろのようですね。椿様」

彰人は椿に呼びかけたが、その声は届いていなかった。

「…」

悲しみを帯びた眼差しで椿は御神木を見つめていた。迷うような瞳で何度も、何度も、まるでその姿を焼きつかせるように見つめていた。

「椿様、お時間がありません」

「…分かっています」

再度、彰人が呼びかけると椿は静かに答えた。そして目を閉じる。
「願わくは 我が命を贄とし 守りの証 目覚めんことを」

言葉と共に椿は、髪を結び上げていた髪飾り『永遠の命』をゆつくりと外し、御神木の前に翳した。

『永遠の命』は匂いたつ様に強く輝き、御神木からわずかに零れていた光が輝きを強めることに髪飾りから輝きが消えていく。そうして暫く経つと、髪飾りから輝きが完全に消える。それと同時に光の中から生まれる様に『盾』が姿を現した。

「…これが『生命の盾』。落雷から村を守った七宝の一つですか」
光が形を取るかのように現れたのは、琥珀色の盾であった。盾にはまるで草木が蔓延るかのように翡翠で装飾が施されており観賞用にも見受けられたが、力強く深い気を発しておりそうでなかった事が分かった。

「今まで『生命の盾』をお守りくださったこと、感謝いたしますね。…どうぞ、ゆつくりとお眠りくださいませ」

椿は御神木へ向かって丁寧に一礼した。そして、そつと盾を手に取り。

それを合図に御神木が見る間に朽ちていく。そう、御神木は『生命の盾』を守護する為に存在した祠だったのだ。長い長い時を経て、ようやくその役目を終わらせる。

「…」

椿は盾を抱え、朽ちていく老木の最期を見届ける。だが、その瞳に涙を浮かべる事はなかった。

第拾章 無音の痛み

そこにある老木の姿は、記憶の中にあるそれとは似ても似つかないものだつた。

生命力に満ち溢れていたかの大樹は、今や力なく根元から倒れ、枯れ落ちたか細い枝を地を這うように広げている。

大樹たらしめていた太い幹は、先刻の落雷で黒く焼け焦げ、木っ端微塵に散在していた。

踏みば音を立ててなくなってしまうような、脆く、儚く、あまりに無惨な姿だつた。

変わり果てた『生命の大樹』を前に、一行は言葉を失っていた。地面に縫い取られたような四つの人影が、漆黒に染まっている。重く澱んだ空気を縫い、低く唸る冷たい風が耳朵を打つ。

「……どうしよう……」

異様な静寂の中、それを破つたのは牙だつた。

その声音は普段の彼女に似つかわしくないほどに弱々しく、何かに怯えるかのように震えていた。

幼い面立ちは色を失い、口元を覆う小さな両手は冷たく、小刻みに震えている。

それは牙に限ったことではなかった。

彼女と共に『盾』の回収に当たっていた倅介もまた、蒼白な面持ちで呆然としている。

倅介と冴が『盾』の回収を一時断念してこの場を後にしてからおよそ一刻あまり。更に一行が天城邸を出てからものの半刻。だが彼らがこの場に駆けつけたときには既に、『生命の大樹』はかような姿となっていた。

そして、この朽ち果てた老木の元にはもはや『盾』は存在していなかった。

残されていたのは、七宝特有の靈氣の残滓と、南雲の靈力^{けはい}だけ。

ここへ真つ先に馳せ参じた水羅でさえ、南雲の姿を認められなかったという。

即ち、一行が到着したのは、南雲が『盾』を回収し、この場から完全に撤収した後だったということ。

……完全な敗北だった。

「戻るぞ」

よく通る声が静寂を切り裂いた。その声に、冴と倅介は身を強張らせる。

それは、不気味なほどに静かな声音だった。

苛立ちも感じられなければ、呵責や威圧もない。

それがかえって彼の激しい苛立ちを表しているようで、無言の呵責を受けているようで、絶対的な威圧があった。

えもいわれぬ重圧に圧倒されていた倅介は、そう言って背を向け歩き出した齋を慌てて呼び止めた。

「戻るって、『盾』はどうすんだよ……？」

その呼びかけに斎は足を止め、体の向きはそのままに視線だけを倅介に向ける。

凍てついた鋭利な双眸が倅介を射抜く。

「過ぎたことにいつまでも固執していたって仕方がないだろう。それとも、このままここで嘆いていれば『盾』が戻ってくるとでも？」

「なら、今から『盾』を取り返しに」

「やめておけ。……無駄死にしたくなかったらな」

斎の言葉は極めて静かだった。波一つたたない水面の如く。

だがそれは凍りつくような冷たさを帯びた静けさだった。凍てついた水面に波など立ちようもない。

それと、同じだ。

「この霊力……、南雲の当主が『盾』の回収に来ている。どう足掻いたってお前が勝てる相手じゃない。返り討ちにあうのが関の山だ」

「……けどよ……」

「それに、力ずくで奪うというのなら今は時期尚早だ。どうせなら、奴等が『杖』を回収するまで待ち、一度に三つ全て奪う方が効率がいい」

現在南雲が所有している七宝は二つ。

一つは、今奪われた『盾』。

もう一つは、かねてから南雲が守護していたものであり、この七宝争奪戦の皮切りともなった『髪飾り』。

しかし南雲はもう一つ、七宝の封印を解く鍵を有している。

天城の知りえない、『杖』の封印を破るための唄を……。

ならばいっそ、南雲に『盾』の封印まで解かせた上で全て奪えば

いい。これは斎のかねてよりの持論でもある。

だが、現実には失態を犯した倅介には、そんな悠長な戦略を是とするだけの余裕はなかった。

「じゃあ若^{シオ}に、『盾』を奪われました、って報告しろってのかよ！？」

一刻も早く失態を帳消しにしたい倅介は、焦燥感から自然と語気が荒くなる。

その言葉に、それまで重圧に耐えるように顔を伏せていた冴も、弾かれたように不安に満ちた瞳を斎に向ける。

二対の縋るような視線に、斎は冷めた視線を返した。

「それ以外に何がある。諦めて腹を決めろ」

さも当然といわんばかりの口調だった。

突き放すように言い切り、今にも崩れ落ちそうな二人から視線を外す。

頼りの綱を断ち切られ、いよいよ二人は絶望と恐怖の底に突き落とされた。

「斎……！」

その様子に、見かねた花音が声を上げた。玲瓏とした声音が響き渡る。

思いもかけないその呼び止めに、斎は驚いたように振り返った。振り返った先で、花音は静かに、だが真っ直ぐに斎に向いていた。澄んだ黒曜の瞳が彼の姿を映し出している。

花音は滅多に感情を表すことをしない。その上、想いや感情を口に出すこともしない。

今もまた然り。

だが、彼女の真意を読み取るのに、斎にはそれで充分だった。

「……解ってるよ」

しばし花音の、一見無表情とも取れる面持ちを見つめた後、斎は小さく息を吐いた。

「心配しなくても、レオには僕から口添えはしてやるよ。結界を張り忘れるなんていう救いようもない凡ミスをしでかしたことに關しては弁明の余地はないが、それは『盾』が奪われたことの致命傷じゃない」

項垂れる倅介と冴を一顧だにすることなく、斎はどこか投げやりな体で淡々と言葉を並べた。

判りにくく差し伸べられた救いの手に、憔悴しきっていた二人の表情が和らぐ。

そんな二人の様子に、心なしか花音の表情にも穏やかさが浮かぶ。それらを気配で感じ、再び軽く息を吐くと呟くように言葉を繋げた。

「それに、お前たちが仮に何の落ち度もなく任務遂行に当たっていたとしても、『盾』の回収は不可能だった」

突然の予想だにしない発言に、倅介と冴はその言葉の意図を測りかねて困惑の色を見せた。

想定どおりのその反応に、斎は剣呑な面持ちで一度左手に視線を落とす。そして、袖口から覗く『指輪』に依然何の変化も見られないことを確認すると、応えるように続けた。

「唄の解釈は間違っていないかった。覚醒に時間を要することも……だが、それだけじゃ不十分だったんだ」

一旦言葉を切り、朽ち果てた大樹を視界の端に捉える。

「七宝にはそれぞれ、司るものがあるんだ。例えば『泰平の勾玉』はその名のとおり、泰平 平安や安寧を司る。同様に、他の七宝にも皆役割がある。……『盾』はそもそも何かを護るためのもの。断言は出来ないが、おそらく『盾』は守護ないしは庇護といった類のものを司っているんだろう。つまり、『盾』が存在するためには、守護の対象となるべき存在が必要だったんだ。そして、その対象となりえたのは

南雲なぐもの持つ『髪飾り』だ」

ここには『盾』の他にもう一つ別の七宝の霊気が漂っている。それは、南雲が既に手中にしている『髪飾り』のものだった。

斎の持つ『指輪』も、花音の持つ『勾玉』も、それら同胞たちの霊気に対して何ら反応を示していない。すなわち、同じ七宝であっても『指輪』や『勾玉』は性質上『盾』とは呼応関係にないということ。

対して、『髪飾り』の霊気が漂っているということは『髪飾り』が何かしらの反応を示したということであり、『髪飾り』は『盾』と呼応し得たということだ。またそれは換言すれば、『髪飾り』もまたその役割を果たせ得たということでもある。

要するに、『盾』は他ならぬ『髪飾り』によって存在意義を与え

られ、その使命のもとに目覚めたということだ。

それは、今まで決死に取り組んできた、封印を解くための要素とは別の次元のもの。もっと原始的な、七宝の存在意義に関わるもの。

斎は内心で舌打ちした。

「仮に覚醒に必要な適当な時間が経過するまでお前たちがここにいたとしても、『盾』は目覚め得なかった」

『盾』の役割など、知る術はなかった。ましてや『髪飾り』のみが『盾』に対応しうることなど、知る余地は皆無だった。

だが、盾というものの性質から、その役割が守護にること、そして守護の対象の必要性を推測することは不可能ではなかった。

以前から気にかかっていたことではあるが、そもそも倅介が『盾』の唄を南雲から易々と盗み出せたということ自体が不自然だったのだ。

気配もろくに消せない倅介のことだ、南雲が彼の侵入を見過ごすはずもない。

にもかかわらず南雲が今まで何ら行動を起こさなかったのは、唄を盗み出したところで『盾』の封印を解くことができないという確信があったから。そう考えれば辻褄が合う。

そこまで考えを至らせられなかったのは自分の失態ミスだと、斎は自覚している。

しかし。

「お前たち二人だけで『盾』の回収に向かわせたレオにも非がある。これは完全な人選ミスだ」

しかしそれは、作戦の総指揮権を有する天城の当主として同じこと。むしろ、当主という地位にありながら七宝の本質的な性質を斟酌することなく、また南雲の動向も計慮することなく、安直にその権限を以って人員配分をした彼にこそ、今回の糾弾の矛先が向けられるべきではないのか……。

「あいつにお前たちを制裁する道理はない」

どこか棘のある口調で、斎はきっぱりと言い切った。そして倅介と冴に向き、だからもう無駄に思案するな、と目で語りかける。そこでようやく落ち着いたのか、二人の表情に色が戻ってきた。さながら、生き返る、を体現しているかのようだ。

「分かつたらさっさと帰るぞ」

言って斎はバイクのエンジンをかけた。

静けさを突き破り、アイドリング音が騒々しく空気を振動させる。

斎に促され、倅介と冴も重い足を動かした。

覚束なさの感じられる足取りの冴を気遣うようにしていた倅介は、斎の前でふと足を止めた。

「斎」

目の前の倅介を見上げ、斎は怪訝そうな視線を向ける。

倅介は軽く周囲を窺った後、やや置いてから、言いくそうにしながらも声を潜めた。

「お前……今でも天城のこと……」

瞬間、斎の瞳が揺れた。それまで僅かな付け入る隙も与えなかった漆黒の双眸に、動揺が浮かんた。

心臓が早鐘を打つ。徐々に大きくなり、煩わしいほどに全身に響く。

それを悟られまいと、斎は極めて平静に努めた。

「……馬鹿言うな」

低く発せられた言葉には、一片の動揺も宿ってはいない。

しかしそれはあまりにも弱々しく、ともすれば掻き消えてしまいうさだった。

「早く帰れよ」

搾り出された一言。これ以上の関与を拒絶するかのように吐き捨てられたその短い一言に、倅介は深追いせず素直に引き下がった。

愛機に跨ると倅介は手馴れた様子でレバーを蹴り込んでエンジンをかけ、冴に乗るように指示を出す。

慣れた手つきで発進準備を整えると、斎に一瞥を投げ、だが言葉は置かずに、クラッチをきって勢いよくチェンジレバーを蹴り上げた。

砂煙を巻き上げながら、黒塗りの機体が遠ざかる。

「……くそっ……！」

それを見届け、斎は我知らず齒噛みした。

……まったく、倅介は普段、極めつけに鈍感で察しも悪いくせに、こ

ういうところだけは敏感に衝いてくる。最も悟られたくない部分を的確に見極めてくる。

脳裏に倅介の言葉が甦り、幾重にも反響する。

違う……！

うるさいくらいに駆け巡るそれを払拭するかのように、自分自身に言いきかせるかのように、斎は心のうちで叫んだ。

天城のことなどどうだっていい。

この世界がどうなろうと興味などない。

宿命も因果も知ったことか。

(……僕は、ただ……)

遠い記憶の中に、一人のあどけない少女の姿がある。

「いつき」と名を呼ぶ幼い声がある。

生まれてはじめて愛おしいと想った、狂おしいほどに慈しんだ、
たったひとりの。

「……斎？」

突如名を呼ばれて、斎は現実を引き戻された。

見れば花音の案じるような面立ちが顔色を窺っている。

「……いや、なんでもない……」

斎は小さく頭を振った。

花音にまで悟られるわけにはいかない。

決して、悟られてはならない。

……彼女にだけは。

「僕たちも帰ろう、花音」

ヘルメットを手に取り、斎はあくまでも平静を装って穏やかに声をかけた。

普段通りに振舞う斎にあえて追及することはせず、だが花音は逡巡する様子を見せた。

「……先に行つて。やらないといけないことがあるから」

「やらないといけないこと？」

鸚鵡返しの問いに、花音は頷くと朽ち果てた老木を振り返る。

「このままじゃ、救われない……」

そう言う花音の瞳が哀愁に揺れるのを見てとり、斎は僅かに表情を歪めた。

花音は幼い頃から植物が好きだった。それらを愛でては、心を寄せ、耳を傾けていた。

そんな彼女にとって、この老木の姿は胸が痛むのだろう。

何百年もの間宝の封印を護り続けた拳句、封印が破られ無惨に朽ちれば見向きもされず、悼まれることもなく捨て置かれることが、彼女には苦しいのだろう。

「僕も手伝つよ」

言って斎はバイクのエンジンを切った。
辺りに静寂が戻る。柔らかな風が頬を撫でる。

「……斎？」

真意を問うように見上げてくる花音に、いいんだ、と頷き、斎は
眼前の老木に視線を落とした。

斎には、花音が感じているような感情を抱き、共に分かち合うこ
となど到底出来ない。

だがそれでも、彼女の気持ちを酌み、それに寄り添うことならば、
それくらいならば……。

いつの間にか、彼を苛む一切の騒音は消え失せていた。今はただ、
不思議と全てが凪いでいる。

まったく、らしくないな……。

その理由に想いを至らせ、斎は自嘲気味に苦笑する。

そんな斎の心のうちを知ってか知らずか、花音は斎に淡く微笑し、
やおら『生命の大樹』の前に膝をついた。

そして朽ちた幹に手を差し、慈しむようにそつと撫でる。

「……ありがとう。おやすみ……」

たった二言の言葉。

だがその二言には慈悲と哀悼が確かに込められていた。

すると、どこからか甘美な香りが漂ってきた。

いとも柔らかく、優しい香り。

まるで花音の言葉に応じたように漂ってきたそれは、既に枯死したはずの『生命の大樹』から溢れていた。

「……死んだはずの木が、香りを……？」

目の前の出来事に、斎は軽く目を見張った。

心地よい清風が淡い香りを連れ、紅に染まる空の彼方へと舞い上がる。

その行方に想いをはせ、花音は愁いを帯びていた表情を和ませた。

『生命の大樹』の役割は終わった。

これで、この大樹も安らかに眠ることができる。

七宝に纏わる運命から解放され、もう何者にも邪魔されずに、静かに、自由に。

あたりに散在する大樹の欠片に視線を落とすと、花音はその一片を拾い上げ、それを両手で包み込んだ。

静かに瞑目し、膝をついて胸の前で両手を重ねるその姿は、まるで祈りを捧げているかのように。

大切そうに大樹の一片を包み込む華奢な両手に、温かい雫が一滴落ちた。

第拾壹章 蒼天の杖（前書き）

若干の流血ございますので苦手な方はご注意ください。

第拾壹章 蒼天の杖

南雲一族のご神木である桜の大樹。それは、春夏秋冬問わずに変わる事無く咲き続けている。

まるで、『時』という枠組みから外されたかのごとく。

散れども花が尽きる事は無く、見る者によつては畏怖さえも感じることだろう。

だが、南雲一族にとって…椿にとってはかけがえの無いものなのだ。

はらはりはらりと風の行くまま、桜花が散る。椿は、懷からそつと扇子を取り出し静かに開く。

「はらはらり 散れど散れども 尽きぬ花」

涼やかな声と共に、ゆつくりと生成り色の扇子を振る。それと呼応するかのごとく、桜の木が光を帯びた。

「御身にぞ 眠らせたまえや 七宝を」

光が帯のように広がり、七宝を包む。まるで、母の腕かいなのように優しく。

「願わくば 守りたまえや 時 来るまで」
きた

そして、椿は開いた時と同じようにゆつくりと扇子を閉じた。それと同時に七宝は桜の木に飲み込まれる。

「椿様」

その様子を見計らつたように一人の青年が声を掛けた。

「…朔真兄様」

朔羅の双子の弟、朔真。姉とは異なり緩やかに髪を纏めてはいるが、それさせ変えれば若干の声の高低と性別の違いはあれど全て瓜二つ。見分けがつく者は、椿を含め数人しかいない。

「朔羅は休ませました。心配をかけて申し訳ありません」

申し訳なさそうに謝る朔真。椿は穏やかに微笑みかける。

「兄様。私ちよつと疲れてしまいました。少し、お話を聞いてから眠りたいのですが…」

そんな椿の言葉に朔真は何かに気付いたように驚く。そうして困ったように笑った。

「分かったよ、椿。久しぶりに戻ってきたんだ。旅の話をしてあげる。…幼い頃のように」

空に浮かぶ月が告げる。 明日は満月であると。

次の日の夕刻、椿は自室に彰人を呼び出した。

「彰人、今宵『七宝』の回収を行います。美夜を呼んできてくださいませ」

「…よろしいのですか？」

彰人の問いに椿は静かに頷く。『指輪』の回収に失敗した美夜に『七宝』の件を関わらせる、周囲がどう思つか椿も分かっているはずだ。

「唄を読み解く限り、美夜の協力が必要ですわ。それに、あくまでも主となるのは朔真。サポートという名目ならば周囲も同意するはずです」

「では、今回は美夜と朔真だけで次の七宝の回収を？」

椿は淡く微笑んだ。そして正面を見据える。咲き乱れる南雲のご神木を。

「残りの七宝も後僅か。近いうちに天城の一味とも…天城とも遭遇しますわ。少しでも犠牲を出さない為に、南雲家当主としての準備を始めます」

その言葉に彰人は手で顔を覆った。その表情は誰にも分からない。そう、椿以外には。

灯が一切存在しない室で美夜は一人、幼い子供のように膝を抱えて座っていた。何処までも深い闇しか存在しない室。だが、突如光が溢れる。

「美夜、いるかい？ 俺だよ」

現れたのは朔真だった。深緑の狩衣を纏い、緩やかに結ばれた髪は流れるように衣へ滑り落ちる。

「…朔羅？」

虚ろな目で問う美夜に朔真は困ったように笑いかける。

「俺は朔真だよ。姉さんは休ませた」

「朔、真？」

「そう、朔真だ。椿様がね、俺の『七宝』回収補佐を美夜に任せただよ」

椿の名前に反応したのか、美夜は勢いよく顔を上げた。

「椿様！！ 怒ってない？ 『指輪』奪われたの悲しんでない？」

朔真に縋り付き、母親に叱られた子供のように聞いた。その瞳には一点の事しか映っていない。

「大丈夫だよ。でも、心配はしていたよ。責任を感じすぎているのでは無いかって」

その言葉を聞くと美夜は安堵したかのようにしゃがみこむ。

「よかった。椿様に嫌われたら美夜、生きていけないもん。美夜、頑張る！ だって、美夜、ううん、美夜」

「はい、ストップ」

美夜の言葉を遮り、拍手を打つ朔真。そうして静かになった彼女の顔をじっくり眺めると、苦笑する。

「あまりのショックで幼児返りをしているみたいだね。まあ、こんな部屋にこもっていたら無理もないか。美夜、一時間後に改めて迎えに行くから、自分の部屋に戻って元に戻っておくんだよ」

朔真の言葉に美夜は無言でうなづく。

「いい子だ。じゃあ一時間後にね」

其は 朔 花と共に 物忌みを
其は 望月 花を捧げ 偽りの望月を生まん
誓いを守りし者の血を 偽りの望月へ 捧げん
朔を冠する者の血で 偽りの望月 打ち砕かん
二つの血 交わりし時 いと貴き導 現れん

夕焼けは沈み、夜が姿を現す。天に金色の月が昇る頃、美夜と朔真は目的地へと着いていた。

「さつきは迷惑かけたわね。朔真」

すっかりいつもの姿を取り戻した美夜は恥じたように言う。そんな彼女の様子を朔真は面白そうに見た。

「いいや、昔の『美夜ちゃん』を見て楽しかったよ。ここ数年はあんな泣き虫さんでは無くなったからね」

「朔真！！」

からかうような朔真の言葉に美夜は顔を真っ赤にして怒った。『紅の女神』とうたわれる彼女も幼少から知っている彼の前では、ただの美夜である。

「さてと、そろそろ始めようか。美夜、準備はいいかい？」

「ええ、いつでも大丈夫よ」

朔真はゆっくりと足を進めた。しばらくすると、水溜りのように小さな、ちょうど月の姿がすっぽり収まりそうな池が二人の前に現れた。

「……」

音も無く、朔真は懷から桜の枝とりだした。そして、静かに花を池へと落とす。

花が落ちた途端、まるで鏡のように池が空に浮かぶ月の姿を映した。

「……美夜」

朔真の合図と共に美夜は小さな懐剣で己の腕を刺した。

「つつ…」

ほんの少しのうめき声を洩らしつつも、流れ出る血を池の月へと落とす。すると月は先ほどまでと打って変わってその色を真紅へと変える。美夜の血を吸ったかのように。

それを見届けると朔真は齒で皮膚を破き、まるで切るかのように血で月を一刀した。

月が割れ、その中央の水が盛り上がる。まるで、水底に眠っていた物が目を覚ましたかのように。

「これが『蒼天の杖』か」

水の中にあるそれを朔真は掴んだ。

そこにあつたのは『杖』だった。『杖』と言っても姿形は錫杖であり、錫杖の遊環ゆかんの代わりに、数多の氷柱のような蒼玉そうぎょくが連なっている。そして、全体の部分は金剛石で作られているのか、鋭くも透き通った輝きを放っていた。

「別名、『天女の錫杖』。天女伝説で語られている『羽衣』はこれだったのでは無いかと言われている物ね」

止血を施しながら美夜が語る。確かにそれは『羽衣』の名に負けない美しさと気品を持ち合わせていた。

「これで、残りはあと二つ。まあ、俺たちが手にいられそうなのは一つだけだね」

空の満月を眺め、朔真は笑う。

「あと一つ…」

美夜は不安そうに顔を歪めた。その瞳には、はつきりとした迷いが見て取れる。

「天城の一味ともそろそろ合間見えるのかね。…逃げたい？」

静かな朔真の問いに美夜は体を振るわせた。

「…いいえ。だって、私達が逃げてしまったら世界は…。それに私には望みがあるもの」

燃え盛る業火の炎。赤に染まった世界。逃げ延びた先にあつたの

は。

「…」

蘇る記憶は色あせる事無く存在する。例え忘れたくとも忘れられない。呪縛のように美夜にまわりつき忘れることを許さない。

早まる鼓動が、息も出来ないほどの苦しみが、彼女の心を落ち着かせる。

（ああ、よかった。まだ私は）

何時しか彼女は笑みを浮かべていた。艶やかな『紅の女神』に相応しい笑みを。

それから暫くして椿の元に報告が入った。

「『杖』の回収完了」との報告が。

「もうすぐ、もうすぐですのね」

空に浮かぶ満月が怪しく輝く。

光を浴びた椿の表情が一瞬、冷たさを帯びた。

夜はまだ…終わらない。

第拾弐章 漆黒の望

よいですか、決して違えてはなりませんよ

遠い記憶。

朧げなその記憶の中の両手がそつと頬に触れる。

それは記憶の中にしかない母親の両手。

母の顔は、もう思い出せない。

覚えているのは、その両手の温もりだけ。

すべてが朧な記憶の中にあつてただ一つ、今も尚鮮明に思い出されるものがある。

それは物心つく頃から毎日聴かされた、一つの詩^{うた}。

母によつて紡がれたそれは、温かな微睡を漂う子守唄のようで。

不思議とそれはまるで躰の一部となるかのごとく、幼い自分の中に入ってきた。

そしていつしか、意味も解らぬそれを一言一句違わずに聴き覚えていた。

それを詠い聴かせる度、母は必ず決まつて言った。

決して他言してはならないと。決して形に残してはならないと。

それが、天城を継ぐ者に与えられた使命であり責務なのだ、と。

*

漆黒の空高くに漂う朧月。今宵のそれは欠けるところのない真円を描いている。

時は丑三つ時。深淵の闇に包まれた世界は不気味なほどに静まり返っていた。その暗がりの中に、生命の息吹は欠片もない。生きとし生けるものは影をも隠し、風さえも深い眠りについたかのように息を潜めている。

そんな無音の世界に突然鈴の音が響いた。黒闇を切り裂くかのうとき、鋭利な鈴の音。

《遅いぞ》

続いて低い声がした。

鈴の音と共に漆黒の闇が動く。それが模るのは、小柄な猫の姿。

《南雲が『杖』の封印を解いた。奴等に遅れを取るなどなんたること》

闇夜と同じ漆黒の毛並みを持つその猫が言葉を投げた先から、応えるようにして跽音が近づいてきた。

闇路に反響するその跽音は徐々に大きくなり、やがてはたと止まった。

「……そう神経を尖らせるな。俺たちは宝を手に入れる速さを競っているんじゃない。結果を出せれば過程はどうあっても構わない」

夜陰の中から聞こえて来た声は少年のものだった。落ち着きのあ
る、無感情とも取れる声音。

「不要な焦燥は判断を誤らせる。以前から言っているだろう、急いで事は仕損じるぞ」

《黙れ！ 貴様は我らが一族の悲願を何と心得る！》

少年が言い終わるが早い、地を這うような低い怒声と共に、黒猫の毛並みがゆらりと大きくうねった。

《天城の家が地に落とされてからこの千年間、貴様の祖先たちがいかな思いで艱難辛苦を耐え忍び、このときのために一族の血を護り続けてきたと思っている！ 貴様がしくじれば、千年の長きに渡る一族の業はすべて徒となるのだぞ！》

黒猫の憤怒の情を表すかのごとく、漆黒のうねりは荒々しさを増す。

荒れ狂う黒猫の放つ靈気は暗闇を裂き、闇の中に身を置く少年を包み込んだ。少年の漆黒の髪が不規則に踊る。

敵意とすら感じられるその靈気を前に、しかし少年は動じた素振りを見せない。

そして無言のまま黒猫の元に歩み寄り、その額に手を翳した。

「静まれ」

一言。

静かに、だが厳かに放たれた、たったの一言。

瞬間、黒猫から溢れていた荒立つ靈気は消散した。

まるで少年の言葉に縛されたかのように、黒猫は身動き一つしない。

黒猫に注がれる少年の黒曜の瞳には、えもいわれぬ冷たさが湛え

られていた。

そこには感情と呼べるものは微塵も感じられない。ただ、無音の静寂の中に絶対の威厳があるのみ。

「他を制したくばまずは己を制することだ。自らを律することができなければ、いずれ自らを見失い、やがては自らに喰われるぞ」

少年は闇をそのまま切り取ったような黒闇闇とした衣服に身を包んでいた。意識しなければ、周囲の夜闇との区別は判然としない。少年は言葉少なに続けた。

「案ずるな。使命は必ず果たす」

その言葉に、黒猫は我に帰ったように少年を見上げる。

《……その言葉、必ず違えるなよ》

釘を刺すような黒猫の言葉に、少年は視線で是と返す。少年は闇に漂う薄月を徐に振り仰いだ。

決して、負けるわけにはいかない。

これは、何を賭しても勝たなければならぬ戦い。
なんとしてでも、勝たなければならぬのだ。
鬼に貶められた、一族のために……。

開け放した窓枠に腰を掛け、斎は霞のかかる望月を眺めていた。

円かなあの月は、明日には姿を変えて現れる。日々姿を変えてゆく闇夜の光。

それは儚く、それでいて神秘的で、そしてどこか妖に満ちている。そんな月を、人々は怖れた。そのために同じ天空に輝く光でありながら、太陽とは対照的に月は妖魔と結び付けられ邪の対象とされた。

人間たちの勝手な偏見によって、一方は至高の神と畏れられ、一方は忌むべき邪神と恐れられる。

……そう。全ては人間たちの、身勝手な空想おそれによって。

淡く降り注ぐ月光に手を伸ばし、斎は目を細めた。

だから、嫌いなんだよ……。

掴めるはずもない月を握り潰すかのように、伸ばした手が拳を固めた。

冷たさを帯びた一陣の風が音もなく吹き抜ける。

風に乱れた漆黒の黒髪を無造作に片手で梳き、斎は消していた部屋の灯りをともした。強烈な光に一瞬目が眩む。

無機質な人工の光が照らし出した部屋は、一言で表せば殺風景そのものだっただ。

十六畳という広さを持つその部屋にはやや古びた畳が敷き詰められ、机と本棚以外には何も存在していなかった。

更に、本棚は空、机の上にも数枚のメモ用紙と一本のペンしか置

かれていない。なんとも寂然とした部屋。

ここは天城邸における齋の自室だった。とはいえ、使っていたのは五つになるころまでで、この部屋に足を踏み入れたのは実に十四年ぶりになるのだが。

この十四年間ですっかり洋式の生活に染まってしまった齋としては、天城邸での生活は一々が不便且つ不自由だった。

例えばそう、寝る際に自分で毎回布団を敷かなければならないこととか。

いつそのまま直に畳の上で寝てしまおうかとも考えるが、流石にこの春先にそんなことをしでかせば確実に体を壊す。

今日明日にでも倅介にベッドを買いに行かせようかと考えつつ、齋が渋々押入れに手を掛けた時。

「おい齋、起きてるか？」

部屋の扉の外から声がした。

聞き慣れた声。誰何せずとも声の主は判る。

齋の表情があからさまに不快感を形作った。

実にいいタイミングだ。よりにもよって、ひとが寝ようとしているこのタイミングに、しかも見計らったように、消していた蛍光灯を点けたこのタイミングで。

そもそも二時半過ぎというこの夜半遅くにひとの部屋を訪ねてくるということ自体が非常識極まりない。

訪問の目的は大方予想がつく。要件を訊かずとも判ってしまうあたりがまた倦怠感を増幅させる。

どうにかしてこの招かれざる訪問者を追い返す術はないものかと齋は思考をフル回転させるが、努力も空しく、この煌々と蛍光灯の点った状況下では誤魔化しは利かないという終着点に至る。

「……入れよ」

斎は諦めたように息をつき、面倒くさそうに扉の向こうに声を投げた。

すぐに扉が開かれ、同時に低く声がした。

「聞いたか、南雲が『杖』を手に入れた」

「ああ」

開口一番放たれた台詞に、斎は興味なさげに応える。

一方部屋に入ってきた、斎曰く非常識極まりない招かれざる訪問者の倅介は、いつになく神妙な面持ちだった。

「これで南雲^{きんぐも}が手に入れうる七宝は全て揃った。ここからどうやって宝を奪うんだ？ 何か策があるんだろ？」

倅介にしては珍しく抑えられた口調だった。

しかしそれは、彼の心中が平静であることを表しているのではない。漲る闘争心が息を潜め、狩りの機会を窺っているだけ。

その様子に斎は冷淡な一瞥を投じ、予想通りの要件^とに心底うんざりした体で大きく息を吐いた。

「……お前は馬鹿か？ 時機を待てと何度言えば分かる」

斎のその一言が倅介の感情のリミッターを外した。倅介は荒立つ感情の全てを乗せた拳を壁に叩き付ける。

「もう十分に待っただろうが！ お前はあの時、南雲が『杖』を回

収するまで待てといった、だから今日この時まで待った！　これ以上まだ待つなんざ冗談じゃねえ！」

荒々しい怒声が夜の静寂を裂いた。猛り狂ったような攻撃色の気が倅介の全身から迸る。

その目はさながら飢えた獣のようだった。

その様子を前に、倅介は少し感情の制御コントロールを覚えるべきだな、と内心で冷ややかに呟き、斎は呆れたように瞑目する。

言葉で言っ て解らないのなら、身に直接教え込む他あるまい。

一呼吸の後、ゆっくりと擡げられた瞼の下から黒曜の双眸が覗く瞬間、空気が張り詰めた。

呼吸もままならない程の圧迫感が空間を支配する。

漆黒の双眸は氷刃がごとく冷たかった。その眼居には静かに燃え盛る修羅が宿っている。

「何度も言わせるな。時機を見誤れば死ぬぞ。身の程を弁えろ」

触れれば切れそうなほど鋭い視線に射止められ、倅介は思わず一瞬身動きした。

その威迫を前に、あれだけ荒れ狂っていた倅介の激情は瞬時に畏縮する。

倅介の気が完全に治まるのを見計らい、斎はふと視線を窓の外へと移した。

「今、レオが『剣』の回収に当たっている」

突然突飛した話題を振った斎に、倅介は意図を測りかね、訝ったような表情を見せる。

対して斎は、そんな倅介に一瞥もくれず、努めて淡々と続けた。

「一介の守護者では、当主の力には及ばない。当主を征しうるのは当主のみ。……分かるか？　いくらお前が奮起しようと、南雲の当主に出てこれられては太刀打ちが出来ないということだ。当主に出てこれたときに対処できるよう、我々も体制を整えておかなければならぬ。即ち、レオがいつでも応戦できる状態にしておくことが最低条件だということだ。こちらの戦闘体勢が整っていない段階で戦闘ふっかけるなんて自殺行為以外の何でもない。これを時期尚早と言わずに何と言う？　みすみす自ら命を捨てに行くような戦を仕掛けるなんて馬鹿げた真似ができるか。少なくとも僕は勝算のない戦いなんて願ひ下げだ。それこそ、冗談じゃない」

心なしか徐々に語気を尖らせながらも淀みなく言い切り、斎は正面から倅介を見据える。

「お前の今後のために忠告しておく。剛勇と蛮勇は別物だぞ。大局を見ずに目下の一事に囚われ、ましてや策もなしにむやみやたらに突っ込んで行くななんて問題外だ。そういうのを血気の勇と言っただ。匹夫の勇とも小人の勇とも言っただ。そんな愚行で一体何が勝ち取れる。無様に徒死にするのが関の山だ。尤も、独りで愚案に落ちて自滅するのは勝手だ。だがそこに他人を巻き込むなど言語道断」

斎の双眸からは既に威迫の修羅は消え失せていたものの、その視線は依然倅介に注がれている。

だが倅介は、彼の瞳に映っているのが自分でないことに気が付いていた。確証はないが、彼の瞳は、自分ではない別の何かを映している。

堰を切ったように滔々と弁ずる斎を前に、倅介はある意味圧倒されていた。

倅介と斎は何しろ付き合いが長い。世間一般で言えば、幼馴染にあたるだろうか。

その倅介を以ってしても、こんな斎の姿は滅多に見ることがない。普段腹立たいほどの余裕を以って斜に構え、いかなるときも憎らしいほどに理知に徹する彼が、感情を高ぶらせている。

どうにも、帰国して後の彼は様子がおかしい。

それは七宝を巡る戦いに臨んでいるからなのか。

或いは、それとも。

倅介は自分でも恐ろしくくらいに冷静だった。

つい今しがたまで感情を爆発させていたのは自分の方だというのは、今では完全に逆転している。

そこで倅介は無意識の内に考えを巡らせている自分の姿に、小さく息を吐いた。

まったく、つくづく損な性分だと思う。

放って置けばいいものを、どうしてもそうできずにいる自分がいる。関わるほど、探るほど、彼は拒絶の壁を増築する。それどころか、とばっちりという名の反撃を仕掛けてくる。関わって馬鹿を見るのは自分だと身を以って解っている筈なのに、それでも関わらずにはいられない。

そんな自分の性分を倅介は一応自覚している。だが自覚したところで直るものでもないし、また、直そうとも思っていない。

だから、救われないと嘆きつつも結局、倅介は反撃覚悟で斎の築く壁を叩きに向かう。

「……お前、何か機嫌悪くねえか？」

「別に」

間髪あけず返ってきた斎の返答はぶっきらぼうなものだった。斎が内心で、お前のせいだよ、と悪態をついていることなど知る由もない倅介は、その返答に納得のいかないような面持ちで「何怒ってんだよ」と呟く。

そんな倅介に斎は不機嫌そうな視線を向けた。

確かに機嫌は悪いが別に怒ってはいない、と声には出さずに吐き捨てる。

だがそこで、はつとした。

気付けば、知らぬ間に感情を高ぶらせている自分の姿がそこにあった。

何故こんなに柄にもなく熱くなっているのか。これでは目の前の直情馬鹿と同類だ。

彼の言うとおり何かに腹を立てているのだろうか。でも一体何に？

不躰な倅介の訪問に腹を立てているといえばそうなのだが、本当にそれが原因か？

では、本当の原因は？

自問して、斎は軽く自嘲した。

愚問だ。実に滑稽だ。

本当は分かっている。全て、本当は知っている。

ただ、気付かない振りをしたいだけ。認めたくないだけ。

本当に、倅介こしけいといると調子が狂う。

幾重にも仮面を被っていても、いつの間にか一枚残らず剥がされ

てしまう。

いつの間にか、本当の自分が曝け出されてしまう。
そしてそれは、真の自分自身と否が応でも向き合わされるということだ。

だから倅介はイヤなんだよ。

やはりたとえ不自然でも無理矢理にでも彼の訪問を拒むべきだった、と今更のように後悔する。

七宝関連の話題と知っていながらまともに取り合った自分が馬鹿だった。

この借りをどう返してやろうかと暫し思案し、そこで斎は何かを思いついたように机の上にあったメモ用紙に何かを書き始めた。

そして書き終えるやいなや、倅介を指で呼び寄せ、一枚のメモ用紙を倅介の眼前に突き出した。

「何だ、コレ？」

そこに記された文面に、倅介は怪訝そうな表情を見せる。

「……『剣』の在処を示す唄　って言ったら、信じるか？」

斎は端整な面持ちに意味ありげな微笑を湛えた。

その斎の言葉に、倅介は目を見張った。次いで視線を斎に移す。
倅介の視線の先で、斎は普段通りの人を食ったような不適な笑みを見せていた。

「ちょっとした頭の体操だ。それが何を意味してるか、当ててみる」

言つて窓枠に腰を掛け優雅に足を組む斎は、普段通りの彼だった。

倅介は眉根を寄せた。

こうなれば気遣いは一切不要だ。というよりむしろ、彼の提示した頭の体操とやらを本気でクリアしなければ罵倒の嵐に見舞われる。倅介は渡された紙切れに記された文字を必死で目で追った。

世を薙ぐ漆黒の影 穢れを抜ふる断罪の業

其の表に映ずるは 咎人の断末魔

朱き文目の燃ゆる 石木に祀られたり

盃の光満ちし刻 氷輪が加護に覚醒めん

＊

目の前で口をあける岩窟はまるで深淵への入り口のようにだった。風の抜ける音が、地を這う呻き声のように不気味に響いている。入り口の片隅には、忘れられたように咲く一輪の花があった。月華に照らされた深紅の花弁が手招くように風に揺れる。

少年は軽く周囲を見渡した。意識を巡らせ、近辺に追跡者のないことを警戒する。

同じようにして周囲の様子を窺っていた黒猫と視線だけで確認を取ると、少年は誘われるように、暗い岩窟の中へ足を踏み入れた。黒猫もそれに追従する。

客人の訪れを歓迎するかのようになり、岩窟の奥から低い歓喜の呻りが轟いた。

《先の『盾』の件、二人の処罰はどうした》

暫くして黒猫から問いが投げられた。岩窟の中に黒猫の低い声が反響する。

「既に処分は言い渡してある。封印場所を探し当て、唄の解読に成功していながらみすみす宝を奪われるというのは由々しき事態だ」

数歩前に行く少年は、問いに答えながらも黒猫を振り返らない。

「だが、ファルコンとサーペントは『指輪』の回収には成功している。その分を考慮した上での処分を言い渡した」

《処分の減刑とは、随分と温いな》

黒猫の声音からは不服の色が滲み出ている。

少年はその反応を予想していたと見え、間髪あけず更に理由を付する。

「今下手に厳罰を下せば、戦力を失うことに繋がりがねない。それどころか暴走して自滅する危険性もある。少なくとも現段階では最低限の処分で済ませるのが最善だ」

そこで一呼吸おき、少年は「それに」と続けた。

「この件に関してはループスが執拗に食い下がってきたからな」

少年の口から出たその名に、黒猫の全身の毛が一瞬逆立った。

「曰く、『盾』の回収を遂げられなかったのは不可抗力だ、と。俺にも責任の一端があると言外に言いたげだったな」

気分を害した様子もなく、少年はただ淡白に事実を述べる。

その態度が気に障ったのか、黒猫は更に不快感を露わに吐き捨てた。

《それで、奴の言いなりに減刑に応じたというわけか》

先の口上も奴の受け売りか、と、黒猫の放つ空気が少年を呵責するが、少年はまるで応えた様子がない。

そんな少年を黒猫は射抜くように睨めつけた。

《君主として臣下の進言に耳を傾けることは必要だ。だが進言をすべて鵜呑みにすることは感心できんぞ。あくまで一つの案として聞くに留めておけ》

「要するに、お前はループスの進言通りに事が進むことが気に入らないのか」

《曲解するな。奴が策士として長けていることは認める。何時如何なる時であろうと、奴は最善の策を導き出す。その布陣にぬかりはない。だが、だからこそ、奴は危うい》

黒猫は一層声音を落として冷たく言い放った。

《奴には気をつける》

そこから不穏な何かを感じ取り、少年はそこではじめて黒猫を肩越しに一瞥した。

ややあつて足を止めると、少年は口元にふと微笑を湛える。

「お前のその提言、一つの案として受け取っておこう」

意味ありげに言つて、少年は黒猫に背を向けた。

背後で黒猫が憎らしげに睥睨しているのが、気配でありありと判る。

しかし少年は黒猫を一顧だにすることなく、遙か奥まで続くと思われる深淵の暗闇を凝視していた。

果ての見えない暗闇。時折響く風の低い呻り声。

三尺ほどの道幅しかないその岩窟の中は酷く暗く、そして冷たかった。

冷気が外套もろとも肌を刺す。触れれば、岩肌は氷のようだった。

この岩窟は冥府へ続くという都市伝説がある。

この岩窟にまつわる怪奇めいた噂は枚挙に暇がない。

実しやかに流れるその噂に、人々はこの岩窟を恐れた。

そして近づくことを固く禁じ、口を揃えて言った。

ここは鬼の住む魔窟だ、と。

少年は瞑目すると、静かに呼吸と精神を整えた。

靈力を高め、馬手で刀印を結ぶ。

そしてきつと眦を決し、「解」と真言を放つと同時に真一文字に一閃した。

すると刀印の軌跡に沿って空間が両断された。切断面から空間が歪む。

歪んでできた隙間の奥に淡い光が垣間見えた、その直後。暗闇一色だった空間は切断面を起点に音もなく蒸散した。

《先代の施した結界を断ち切れた程度で、間違っても上々などと思うなよ。貴様には断ち切れて当然の結界だ。むしろ時間がかかりすぎだ》

どこまでも続くかのように見えていた暗闇は、先代の天城家当主が施した結界の見せる幻影だった。部外者の侵入を拒み、選ばれしもののみに扉を開く、絶対の砦。

結界が消滅する様を前に、黒猫は隣に立つ少年に冷厳に言い放った。

少年は無表情のまま黒猫に一瞥を投じる。しかし言葉を置かず、目の前に広がる景色に視線を移した。

二つの黒い影の前には、一面に広がる紅^{あか}があった。それは一面に咲き誇る菖蒲の花だった。

岩窟の入り口に忘れ咲いていたあの一輪と同じ、深紅の菖蒲の花。

少年はその紅^{あか}色の海の中へと分け入った。

広く開けた空間は円形を描いている。その直径は大体今までの道幅の五倍ほどだろうか。

天井は高く半球円を形作り、その円蓋の中央には、さながら天窓のごとく小さな円形の穴が開いていた。

その穴から差し込む月の光が、地表を覆い尽くすように咲き乱れる菖蒲の花を照らし出している。

少年は月下に身をおくと、天井の穴から覗く佳月を振り仰いだ。
黒曜の双眸に焼き付けるように、闇夜に浮かぶ真円の光を眩しそ
うに見つめる。

すると少年の耳に鈴の音が突き刺さった。

早く封印を解け、という黒猫の催促に、少年はまるで感情の読め
ない表情のままその場にやおら片膝を付いた。そして静かに頭を垂
れ、瞳を閉じる。

刹那、全ての音が掻き消えた。

次いで少年を取り囲む一面の紅がざわめき立つ。

少年は心の中で、一篇の詩を幾度か反芻した。

幼い頃毎夜母に聴かされた、忘れまいと幾度も繰り返し己に聴か
せてきた、一篇の詩。

母から受け継いだその詩を、『剣』の封印を解くための鍵となる
その詩を、静かに唱える。

詠唱が終わると間もなく、菖蒲に覆われた地表からふわりと一陣
の風が吹き上がった。

少年の漆黒の髪が風に踊る。

すると、月明かりが紅い海に描く真円の輪郭が灰白い光を帯びは
じめた。

はじめこそ頼りなく弱々しかったその光は、徐々に力強く鮮明な
ものになってゆく。

眩しいくらいに輝きを増した頃、光る円周から五本の光が内側へ
走った。

五つの光は曲折しながら円の中央へと向かう。
やがてそれらは中心部に　そこにいる少年の許に集結した。

見れば、少年を中心に、光が複雑な魔方陣を描いている。

少年は徐に立ち上がった。

それに呼応したかのように光の魔方陣は収縮し、少年の掌の上に浮上した。

少年の掌に収まると、魔方陣から淡い光が溢れだした。溢れる光はゆっくりと形を成してゆく。

光が細長く一尺ほどの長さに達したとき。

何の前触れもなく、突如光が消え失せた。

強烈な光を放っていた魔方陣も、淡く細長い形を作っていた光も、瞬時に掻き消えた。

一瞬空間を暗闇が支配する。

少年は自らの掌の上で何かが大きく脈打つのを感じた。

皓々と月光が照らし出す弓手の上。

そこには、一振りの日本刀があった。

漆塗りの黒い鞘に同じく黒一色の柄と鍔。掠れた紋が彫られている以外に装飾の類は一切見られない、黒作りの太刀。

少年の目にえもいわれぬ強い光が宿った。

これが七宝が一つ、『断罪の剣』。

そして、天城家に代々伝えられ、当主によって祀り護られてきた、文字通り伝家の宝刀、

「……名刀『つきかげ月影』……」

倅介は必死に小さな紙切れと睨み合っていた。
その姿を面白そうに眺めやり、斎は小ばかにしたように声を投げる。

「言葉が難しくて解らないようなら、辞書でも貸そうか？ ああ、読み方も分からないなら電子辞書の方がいいか？」

あからさまに馬鹿にした物言いに、倅介は反射的に「ああ!？」と柄悪く声を上げる。

(この野郎……!)

完全に楽しんでやがる。でもって完全に馬鹿にしてやがる。そもそも、この部屋の何処に辞書があるというのだ。

「要らねーよ！ 英語で書いてあるわけじゃあるまいし!」

倅介は斎を睨みつけるが、あえて辞書には言及しなかった。下手に突っ込めば墓穴を掘ることになりかねない。
必死に強がって見せる倅介に斎は満足そうな笑みを向ける。

「わざわざ英語にするなんて無意味なことはいさ。まあ、英訳して欲しいならしてあげるけど？」

嫌味たっぷりに言っただけにさらに言葉が続けようとした、その時、斎の中で何かが触れたように心臓が強く脈打った。

斎は表情を一変させ、その何かの気配を探るように窓の外に視線を向ける。意識を集中させ、気配を正確に捉える。

そして、確証を得た。

斎の面立ちが険を帯びる。

闇色の冷たい風が吹いた。

「倅介、残念だが時間切れだ」

突如^{トーン}声音の変わった斎に、紙切れを睨みつけていた倅介は不審げに顔を上げる。

険しい表情で窓の外、その彼方を見やる斎の姿に、倅介は状況を
得た。

『剣』が目覚めた。

＊

手に入れた『断罪の剣』を腰に佩き、岩窟から身を出すと、少年は明月を見上げた。

霞の晴れた白銀の光は、凍てつくほどに鋭く澄んでいる。
鼓動が高鳴った。

少年は『剣』の柄に手をかけ、ゆっくりと鞘から刀身を引き抜く。

夜陰の下その姿を現したのは、闇を具現したかのような漆黒の刀身だった。

鏡のように磨きぬかれた刀身に、氷のような月が映る。

再び『剣』が強く脈打った。

まるで生きているかのように『剣』は少年の手の中で鼓動を続ける。

少年は『剣』から伝わってくるその鼓動に、高ぶる自らの鼓動を同調させようと霊力を研ぎ澄ませた。

しかし、『剣』は容易にはそれを許さない。

少年は小さく舌打ちした。

その静かなる攻防を、黒猫は厳しい視線で見守っていた。

これは、『剣』の与える試練。

『剣』は使い手を選ぶ。『剣』に使い手として認められなければ、『剣』の持つ力を借り受けることは叶わない。

そうなれば、『断罪の剣』はただの鉛刀も同然。

少年は端正な面持ちを顰めた。双眸に宿る光が鋭さを増す。

一族のために、この戦いに勝つために、『剣』の力が何としても必要なのだ。

この力を自家薬籠中のものとすることができなければ、一族を救うことは叶わない。

抵抗を示す『剣』を押し伏せるように、少年は力を込めた。

鬼に貶められ、闇に落ちた一族を救うために……！

「俺に従え……、『月影』」！

闇を裂く少年の呼号に、『剣』が応えた。

冷たい月明かりを浴びた漆黒の刀身が白銀に煌めく。

少年と『剣』の鼓動が重なり、少年の手の中で『剣』が大きく脈打った。

間髪空けず、少年は袈裟懸けに『剣』を振り上げる。

漆黒の空に一筋の閃光が差し上った。『剣』の切っ先が白月を捉える。

少年は、己の鼓動と『剣』の鼓動が完全に同調しているのを全身で感じていた。

品定めのみ、『剣』は主として自分を選んだのだという事実、少年は口角を上げた。

これで漸く、一族の悲願が成就する。

今こそ、千年の因縁を断ち切るとき。

『鬼』の呪縛を解き放つとき。

少年は脳裏に母親の姿を描き出す。記憶の中に住む、顔のない母が微笑んだ。

頼みますよ……飛鳥^{あすか}

少年 いや、天城家当主・天城飛鳥は、『剣』を手に、岩窟の淵に咲く一輪の菖蒲を一瞥した。

刹那。夜陰に白銀の一閃が走った。

飛鳥は漆黒の剣を鞘に収め、岩窟を背に歩き出す。

その背で、無惨に両断された紅い花弁が風に舞った。冷たい月華に散るその深紅は、まるで闇夜に散る鮮血のようである。

「機は満ちた。千年越しの因果の決着をつけよう……」

低く静かに発せられた言葉が夜闇に溶けて消えた。

飛鳥の中に漲る靈力が静かに猛る。

精悍な面差しは、正しく闘将のそれだった。

玲瓏たる氷鏡が闇の中から二つの漆黒の影を照らし出す。

無表情の月花に詠い聞かせるように、飛鳥は母の残した封印の唄こもりうたを今一度口号した。

よをなぐしつこくのかげ　けがれをはらうるだんざいのこ
そのおもてにえいずるは　とがびとのだんまつま

あかきあやめのもゆる　いわきにまつられたり

さかづきのひかりみちしとき　ひょうりんがかごにめざめん

第拾弐章 漆黒の望（後書き）

常日頃から“短く纏めることを目指す”と言ってきたはずなのに、
気付けば自分でも驚くくらいの長さになってしまったこの拾弐章。
流石に今回ばかりはやりたい放題すぎたと深く反省しております、
仁です。

この場を借りて、お付き合い頂けました皆様に、心よりの感謝を。

さて今回、（性懲りもなく）作中で封印の唄が出てまいりました。
もうお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、

例によってこの唄の解説はブログの方に掲載する予定であります。
前回の『勾玉』（第肆章）のとき同様、今月は解説のヒントを掲載
し、

解説（正解）は来月改めまして掲載致します。

作者の戯れにお付き合い頂ける方は、一度ブログのほうに足をお運
び下さいませ。

これからいよいよ物語りも佳境に入りますので、
これからでしょうか『いつわりの仮面』^{ベルンナ}をよろしくお願い致します。

八月吉日 仁

第拾参章 悲しみの齒車

満開の桜花が舞い散る中、誰かが涙を零していた。艶やかな漆黒が背を覆い、柔らかな瞳が絶望の色に染まっていた。

「」

震えた唇が小さく言葉を紡ぐが、風に掻き消され誰の耳にも届かない。ああ、あれは。

「姉^{ねえ}」

己を呼ぶ声に、椿はゆるりと目を開けた。

「…創太。おはようございます」

「…はよ。…学校」

拙い言葉で椿に呼びかける創太。その瞳は不安に駆られているようだった。

「どうしましたの？ 久々に登校するから緊張していますの？」

その問いに創太は否定するように首を振った。そして、おずおずと椿の顔を窺う。

「…怒ってない？ …まだ駄目？」

椿は思わず微笑んだ。まるで、母親に叱られたような子供のように。

「『指輪』の件ですわね。怒ってないですよ。ごめんなさいね、処罰を与えてしまって。怖かったでしょうに」

創太の頬を優しく撫で、悲しそうに椿は謝る。その手にすがりつくようにしながら、嬉しそうに笑う創太。

「…大丈夫。…でも『指輪』…」

「もう過ぎた事です。それより創太、客間の手入れをしてくだらない？ 近々、お客様がいらっしゃるそうですから」

椿の言葉に創太は顔を勢いよく上げた。その瞳には驚愕の色が浮かんでいた。

「…誰？」

「…大切な方が悲しむかも知れないけれど、その方を守る為にやっ
てはいけない事をしに来る方ですわ」

そう語る椿の顔には、寂しそうな微笑が浮かんでいた。

椿達が在学している学校は、名を『私立横浜英宝学院』^{えいほう}という。
中高一貫で幼稚園から大学までを擁しており、百年前より存在する
歴史ある学院である。

彼女らが持つ異名もこの学院の者たちにより付けられたものだ。
そして、一般生徒及び教職員、近隣の人々に至るまで一般人に『
神』と呼ばれる一族『南雲』を知っており、敬愛している。

だが、その一方で『鬼』の一族『天城』とそれに連なる者を嫌っ
ているのだ。

全ては千年前の『事件』によって。

「ねえ知ってる？ 『白の女神』達が久しぶりに登校して来るんだ
って！！」

「マジ？！ って事は『聖者』とか『天使の王子』も来るって事よ
ね！！」

女子生徒達は黄色みを帯びた奇声を上げる。

「おう聞いたか！！ 『紅の女神』登校だってよ！！」

「マジかよ！！ 白と紅、二人のアイドルが来るんなら、さばれね
ーじゃん！！」

男子生徒達は歓喜の雄たけびを上げる。

男女ともが今か今かと彼女らの登校を待ち望み、校門を見つめて
いた。そして、その期待に応えるかのごとく、『神』の一族が姿を
見せた。

柔らかな風に靡く漆黒の髪、儂くも美しく慈愛に満ちた笑みを浮
かべ、椿は現れた。『白の女神』と謡われる少女の傍らには、穏や
かな空気をまとった青年、『聖者』の異名を持つ彰人が並ぶ。彰人

の反対側、椿の左には、『天使の王子』の名に相応しいほわりとした微笑を浮かばせた創太が並んだ。

そして少し遅れるように、時折表情を翳らせながらも、艶やかな笑みを出した『紅の女神』、美夜が歩く。

「皆様、ごきげんよう」

椿の一言に、彰人達を除く全ての学生、大人が歓声を上げる。

「人気者ですね」

彰人は困ったように微笑む。無理も無い。時期を空けて登校するといつもこうなのだから。

「椿さん！！ 成果の程はいかがですか！？ 『鬼』の様子はどうですか！！」

興奮気味に一人の女生徒が椿の前に出て尋ねた。その言葉を皮切りに様々な人が声を上げる。

「大丈夫よ！ 椿さん達が『鬼』に負けるわけ無いもの！」

「そうだ！ 『神』にたてつく『鬼』には天罰が下るんだ！！」

「早く、死んで欲しいよ。あんな化け物がいたんじゃ落ち着いて寝れやしない」

「あんな奴ら、なんで生きているんだろう」

悪意に満ちた声の数々、話すたびに嫌悪の空気が場を包み、一人の表情も歪んでいく。

「皆様、そう仰らないでくださいませ。彼らは私たちと同じ『人』ではありませんか」

悲しみに満ちた表情を浮かばせ訴える椿。

「椿さんは優しいですね。『鬼』とあたし達も『神』とあたし達も一緒じゃないのに」

「あつ、勿論椿さんたちは『化け物』じゃなくて『すばらしい神』ですよ！」

「そうですよ！！ 椿さんたちは俺らとは良い意味で違うんですから！！」

それらの言葉に、椿は顔を伏せた。だが、それも一瞬の事。すぐ

に顔を上げ、優しく微笑んだ。

「そうですわよね。可笑しな事を言ってしまいましたわ」

「椿、疲れが出てしまったんですよ。保健室で休みましょう」

彰人はそう言くと、椿を優しく抱えその場を後にした。

歯車は、静かに動き出す。

第拾肆章 純白の咎人

桜祭りに行こうと、約束していた。

大岡川の桜が満開だから、と。

でもその約束が果たされることはなかった。

*

「おい、聞いたか、例のアレ」

「夜中の白い光だろ？ 鬼の仕業だつてな」

「俺見たぜ！ こう、白い光が柱みたいにさ」

「その光、例の魔窟からだって聞いたんだけど、マジ？」

「位置的に見て間違いないな」

「マジかよ！？ あの魔窟がヤバイって話、ホントだったんだな」

「なあ、折角だから放課後行ってみねえか？ 鬼の魔窟にさ」

「冗談よせよ！」

「やめとけて！ 鬼に呪い殺されるぜ？」

……予想はしていた。

噂は本当に広まるのが速い。

以前『盾』の封印を解いたときもそうだった。あの時は日中に起きた快晴の落雷ということもあり、実際に目にした者も多かったらしい。翌日の教室はその話で持ちきりだった。あるうことが、授業丸一時間分を噂話に提供してくれた教師もいたほどだ。まったく、

県内屈指の進学校が聞いて呆れる。

しかし、覚悟はしていても、やはり事実無根の噂というのは聞いていて気分が悪い。

しかもそれが、悪意に満ちたものであるから尚更だ。

「鬼って言ってもさ、あたし達と見た目は変わんないんでしょ？」

「そうそう。街中ですれ違ってても変わんないと思うと怖いよね」

「電車で隣に載ってるやつが実は鬼だったり、とか？」

「うわ、怖ッ！」

「鬼だつたら鬼らしく角でも生えてりや判りやすいのに」

「ホントだよー」と、どつと笑いが起こる。

その様は中学生のいじめっ子そのものだった。

……実に勝手なものだ。

勝手に『鬼』というイメージを作り上げ、それをさも真であるかのように語り継ぎ、新たな事実を創り出す。

『鬼』の真実など、何も知らないくせに。

「俺の従兄が英宝に通ってんだけどさ、今日神の一族が来てるらしいぜ」

「うっそ、椿様来てんの！？ いーなあー、オレも会いてー！」

「オレ授業サボって英宝行って来ようかな」

「なあなあ、サイン頼んだらしてくれると思うか？」

「バツカじゃないの？ アイドルじゃあるまいし」

「つか、神サマ相手にサインとか、畏れ多いっての！」

「あーあ、俺もやつぱ英宝行けばよかったなー」

「うちはただの進学校。向こうはある意味真正正銘の神学校だもんな」

「言えてる！」

人々は南雲の一族を『神の一族』と呼ぶ。

そして反対に、天城の一族を『鬼の一族』と呼ぶ。

理由は他でもない。千年もの昔からずっと、そう呼ばれているから。そう教えられたから。ただ、それだけだ。

「マジ鬼なんてさつさと消えちまえばいいのに」

「あんな奴等、みんな神サマに滅ぼされちゃえばいいのよ」

「神サマも何でいつまでも野放しにしておくのかしら？」

「あれじゃね？ 神サマは全てのものに分け隔てなく平等に愛を分け与えるスバラシイ存在だから、鬼退治を躊躇ってんだよ」

「おいおい、オレらと鬼は同じかよ？」

「情け深い神サマの目から見れば一緒なんだよ、きつとさ」

「あー、もう慈悲とかどーでもいいから、鬼に怯える哀れな俺たちを早く助けて欲しいわ」

「そうよ、鬼は所詮鬼なんだから」

「鬼に情けは必要ねえ」

「ホント、マジウゼエ」

「とつとと死ねよ」

「鬼なんて皆死んじまえ」

「そうだ、死ね」

「死ね」

はじめのうちはただの悪口だった会話が、徐々に陰を帯び、憎悪に満ちたものへと変わっていく。

聞くに堪えない言葉に耳をふさぐも、教室に溢れる黒い言葉は直に身体に突き刺さる。

心無い言葉は自分に向けられたものではないのは分かっている。だが、我がことのように辛い。いや、むしろ自分のことであるなら

反論も出来る分、いくらか楽かもしれない。

この場から今すぐにでも逃げ出したい。そんな衝動に駆られる。それをギリギリの精神状態で保っていた小さな背中に、追い討ちをかけるような言葉が投げられた。

「鬼は世界を滅ぼして人間を皆殺しにしようとしているんですってね。いわば鬼は全人類の敵。なのに、そんな鬼に味方するような人間がいるんだから、私にはそっちの方が信じられないわ。ねえ、秦野^{はだの}さん？」

頭上から降ってくる棘のある声に、冴はゆつくりと顔を上げた。数人の女生徒を引き連れ、正に女王様然とした少女が視界に止まる。高圧的に腕組みをした少女は、躊躇いも悪びれもなく冴の机にどかつと腰を降ろした。

「どうしたら鬼の肩持とうなんて血迷った発想ができるのかしら？」

気付けば、いつの間にか教室は静まり返っていた。全員が全員、冴と少女のやり取りに関心を寄せているようだった。

その空気が気にいらぬ冴はあえて少女の挑発を無視する。だがそれは少女の神経を確実に逆撫でた。

「あら、シカトなんて随分と失礼ね」

机の隅に冴の携帯を捉えると、少女は断りなく携帯を取り上げた。

「勝手に触らないでよ」

あろうことか勝手に携帯をいじり始めた少女に冴は咄嗟に抗議の

声を上げる。

その声に普段の明るさや無邪気さはない。どこか冷たい、突き放したような口調。

少女はといえば、ロックがかかって操作が出来ない携帯に舌打ちして一瞬苛立った様子を見せたが、やがて表情を一変させた。

「アナタ、天城の家に出入りしているそうね？」

突如少女の口をついて出てきた言葉に冴は思わず瞠目した。

どうしてそのことを ！？

どこかで姿を見られるような失態をしただろうか。

いや、天城への出入りには細心の注意を払っていた。誰かに見られているはずはない。

では、何故 ？

すると、少女がにやつと不適に笑んだ。

その笑みを見て、冴は悟った。

少女の発言は確証に基づいたものではない。ただの、ブラフ。

（はめられた……！）

心のうちで地団駄を踏む冴を前に、少女は勝ち誇ったように盛大に嗤いだした。

「そう！ やっぱりそうだったの！ やっぱりアナタ鬼と繋がってたの……！」

「……何、言ってるのよ……」

「言訳したって無駄よ！　今のはつきりしたもの！」

甲高い少女の声の後ろで、クラスがどよめきはじめた。

「ようやく分かったわ、何でアナタが鬼の肩を持つのか。奴等と個人的に親交があれば、そりゃあ当然肩持つわよねえ？」

詰め寄る少女に焦燥感が煽られる。

ここで自分が天城と　『鬼』と関係があることを認めるのは得策ではない。だが、少女の確信を覆すのはどう見ても容易とは思えない。　ならば。

「だったら何よ！？　別にあたしが誰とつるんでようとあたしの勝手でしょ！？」

これ以上仲間へ向けられる侮蔑や罵倒を聞かされるくらいなら、いつそ自分がそれを正面から受けて立ってやろう。

感情のままに叫んで、少女の手から携帯を奪い返した。

その瞬間。

バチツと何かが弾けるような音と共に、少女が短く悲鳴を上げた。一瞬遅れて、冴は息を呑んだ。奪い返したばかりの携帯が手から滑り落ちる。

しまった……。

全身から血の気が引くのが分かる。頭の中が真っ白になった。

少女は冴に触れられた手を抱えながら、痛い、痺れる、と涙目でクラスメイトに訴えている。

少女の性格からすれば、その大仰さ故に演技ではないかとも思えるが、それが演技でないことは冴自身が一番よく分かっていた。

「ちょっとアンタ何したのよ!？」

「凄く痛がつてるじゃない!」

「謝んなさいよ!」

非難の声を向けてくるクラスメイトに、冴は数歩後ずさりした。

脳裏に雷毘の言葉が甦る。

彼女は常に言っていた。

独りでは『力』を十分に制御出来ないのだから、独りの時には決して『力』を使ってはならない、と。
そして、感情が高ぶると『力』が暴走するから、気をつけなさい、と。

「何が起こったんだよ」

「それに何だよ、今の音」

尋常ではない状況にクラスがざわめきだす。
すると、誰かがぼつりと言った。

「鬼」

それが、引き金だった。

それまでの動揺は恐怖へ変わった。ざわめきは悲鳴へと変わった。
「鬼が出た」「殺される」と緊迫した叫びをあげながら、我先にと教室から逃げ出そうとするクラスメイトたち。

それより一足早く、冴は教室から駆け出していた。

耳を劈くような悲鳴が背後から聞こえる。

それを振り払うようにして、ただ全速力で学校を後にした。

学校を飛び出した冴は、その足で天城邸を目指していた。

あの騒ぎでは秦野じふんの家には帰れない。天城の家に落ち着く以外他になかった。

脳裏でいくつもの声が錯綜する。

嫌悪に満ちた罵声。

恐怖に染まった悲鳴。

『鬼』という言葉が重くのしかかる。

それらの声を掻き消すように、冴は声に出してわざとらしくぼやいた。

「あーあ。財布くらい持って来れば良かった」

教室を飛び出したとき、何かを持って行くなんていう発想をしている余裕はなかった。だから鞆も何もかも教室に置いたままだ。

あの状況下ではいた仕方のないことではあるのだが、おかげで天城邸に行こうにも足が確保できずにいた。せめて財布くらい持ってくれば交通機関を利用することもできたのだが、如何せん綺麗な一文無し状態である。

ここから天城邸までは電車でも一時間ほどかかるというのに、それを徒歩でいったら、一体どれくらいかかるのだろうか。

前途多難な状況に大きいため息をついた、その時。

「お前、こんなとこで何やってんだ？」

ぶつきらばうな声があった。

よく聞き知った声に、冴は弾かれたように顔を上げる。

今まで下を向いていたせいで気付かなかった。

目の前には、金髪の柄の悪そうな青年が 倅介が、そこにいた。

「でも本当に助かったよ！ たまには役に立つんだね！！」

「何が『たまには』だっ！ カワイくねーこと言ってっと」

「それより倅介君は何でこんなとこにいたの？」

学校はとうに始まっている時間だというのに、制服を着た、しかし靴は上履きの女子学生が何も持たずに独りで街中を歩いている

誰が見ても明らかに不自然な状況だった。

だが倅介はそのことについて何も訊いてこなかった。ただ「乗るか？」とヘルメットを投げてよこしただけ。それが、冴にとっては非常にありがたかった。

事の成り行きを説明するには、再びあの嫌な声を思い出さなければならなくなる。それは、今の冴には耐えがたい苦痛だった。

彼はデリカシーなどというものとはおよそ無縁と思っていたが、案外そうでもないのかもしれない。

冴は幾分か安堵したように微笑した。

一方その当の倅介はといえば。

心外な発言をされ、その上反論も途中でかき消され、なかなか

ご機嫌斜めの様子だった。

冴の問を受け、心底苛立たしげに吐き捨てる。

「……バレたんだよ、アイツの車勝手に乗って傷付けたの」

ここで言う『アイツ』が誰を指すのかは言うまでもない。
曰く。

渡英に際し、倅介は彼から愛車の管理を託されていたのだが、管理の見返りとして少しくらい乗り回しても問題はないだろうと調子付いた結果、車体に見事なストライプを刻んでしまったらしい。

「それはどう考えたって倅介君が悪いでしょ」

「いいじゃねーか、少しくれえ。俺のとこ置いて自分はイギリス行つてんだからよ」

「だからって他人ひとのものの勝手に使っちゃいけないんだよ。それで疵付けられたら誰だって怒るって」

「疵つたってバンパー少し擦っただけだぞ!？」

「疵は疵じゃん」

「うつせーな! バンパーっつーのはもともと疵付けるためにあんだよ!」

バンパーの存在意義をどうにも取り違えているらしい倅介とこれ以上この議論しても無駄だと判断した冴は、別の問いを投げかけた。

「斎君の車って高級車でしょ? どうすんの?」

「ペンキで隠す」

即答だった。

なるほど、そのためのペンキを買いに来ていた、ということのようだ。

「……それ、やめた方がいいと思うけど」

「何でだよ、絶対バレねーぞ」

「いや、絶対バレるって。修理どころかむしろ逆効果だよ」

「そう言うけどな、お前！ あんな車修理出したらいくら取られると思っただよー！！ 全うな修理なんざ出せるかッ！！」

無断で乗り回した挙句自分のミスで疵付けたというのに、随分な言い草だ。

しかし当の本人は怒り冷めやらないらしく、そもそも二十歳にもならんガキがフェラーリを愛車などと抜かしていること自体がふざけてやがる、と愚痴を並べている。

確かに倅介の言うとおり、愛車というには年齢不相応な高級車だ。でも、と冴は首を捻った。

「でもあれって斎君がお父さんから貰った車でしょ？」

彼の父親は三度の飯よりも車が好きな人だった。

毎日のように愛車を磨いては満足そうに眺めていた。

ガレージには確か数台の車が並んでいたように記憶している。その内の一台を息子に譲ると言っていた。数台あったうちのどれを斎が譲り受けたのかは知らないが、いずれも高級車だったのは確かだ。

しかし倅介は、何を思ったか若干間を置いた後、不機嫌そうな声音でそれを否定した。

「ちげーよ。陸上の親父さんのはアウディ。フェラーリはアイツが自分で買ったやつ」

これには流石に冴も驚いた。陸上の家が裕福だったのは知っているが、まさかあの年でフェラーリを自腹とは。

いやそれよりも、彼はかなりの吝嗇家で、どちらかといえば高級嗜好を毛嫌するような印象が強かったのだが……。

でもとにかく、彼が自分で買ったというのなら尚更。

「そりゃあ怒るよね、斎君」

「あーもー、ッるっせーな！！ 今日アイツが帰ってくる前に直さなきゃいけねーんだ。てめーも手伝えよ！」

しみじみと言う冴に対して、怒気に満ちた声で決め付ける倅介。犯罪の片棒を担ぐような罪悪感と抵抗感があるのだが、途方に暮れていたところを拾って貰った恩のある冴に断ることは出来なかった。

嘆息交じりに「ハイハイ」と気のない返事をしたところで、冴はふと疑問を口にした。

「斎君、出かけてるの？」

「花音と二人で朝から出てった」

「花音ちゃんと？」

そう訊き返して、はっとした。

花音は滅多なことでは出かけない。その彼女が月に一度、必ず出かける日がある。それは。

「……そっか、今日、だよ。花音ちゃんのお父さんとお母さんが亡くなったのって……」

両親の墓参りだ。

必ず、一度も欠かすことなく月命日に。
そして今日は、祥月命日だ。

「 違う。死んだんじゃねえ」

突然、倅介が低く呻った。

「殺されたんだよ！ 城崎の親父さんもお袋さんも、クズ野郎共に
殺されたんだ！！」

搾り出すように吐き出された、恨みに塗れた叫び。
怒りに震える倅介の背にしがみ付き、牙は唇を噛んだ。

……そう。

倅介の言うとおり、城崎花音の両親は『死んだ』のではない。
殺された』のだ。

彼ら二人を鬼だと恐れた、人間たちによって 。

*

父も母もとても優しい人だった。
いつもあの大きくて温かい腕で抱きしめてくれた。
三人で花の世話をするのが何よりも楽しかった。
平凡で質素ではあったが本当に幸せだった。
優しくて温かい両親が、大好きだった 。

今日のために育ててきた鈴蘭を恭しく目の前の躑躅に備え、花音は静かに合掌した。

純白の花を咲かせるその躑躅は、傍目には何の変哲もないただの躑躅だ。それに花を供え、膝を突いて手を合わせる姿は、何も知らない人間から見れば異様と映るだろう。

だが、これはただの躑躅ではない。この下には、大切な両親が眠っている。

……そう。この躑躅は、両親の墓標。

しばらく黙祷を捧げた後、そつと躑躅に手を伸ばす。
汚れなく美しく、しかし凜と咲き誇る躑躅は、両親の面影を思い起こさせる。

「……また、来るから……」

両親の笑顔を思い出し、花音は寂しそうに微笑むとやおら立ち上がった。

「もう、いいのか？」

同時に背後で声がした。振り向けば、いくらか離れた場所に、どこか居心地の悪そうな佇まいの斎の姿があった。

彼とこうして両親の墓参りに来るのはもう数え切れないほどになるが、それでも彼は未だにここに来るとどうにもぎこちない様子になる。

そのぎこちなさが何故のものなのか、それを察した花音は穏やかに顎を引いた。

斎は変わった。

時折、ふとそう感じる瞬間がある。

殊にこの数日はそれが頻繁に、そしてより顕著になっているように感じられる。

花音は向かいに座る斎に視線を向けた。

注文を取りに着たウェイトレスにオーダーを出す姿は、一般の青年と変わるところはない。どこにでもいる、普通の青年だ。

自身の本心や本性を決して他人に悟らせない完璧な所作。その処世術は実に見事なものだと思う。

彼を見て、一体誰が思うだろうか。

彼が、天城に連なる『鬼』の一族の者であるなどと。

ウェイトレスが去った後、斎はすまなそうに口を開いた。

「ごめんね、こんなところで。本当はもっとまともなところでちゃんとしたもの、と思ってたんだけど……」

その言葉に花音は内心で苦笑した。

彼だって本当は、こんなファミレスなどではなく、それなりのカフェが何かに入りたかったに違いない。それでも彼があえてこちらを選んだのは、人が多い場所が苦手な自分を慮つてのことだと花音は分かっていた。

時刻は昼時をとくに過ぎたティータイム。この時間なら、カフェよりもファミレスの方が人が少ないと読んだのだろう。現に店内には彼らのほかに数組の客しかおらず、さほど人の気配に窮屈を感じ

じずにいられる。

彼はいつもそうやって当たり前のように気遣ってくれる。

「これなら大丈夫。……ありがとう」

そんな彼の優しさに応えようと、花音は努めて柔らかく微笑んだ。それを聞いた斎もまた、安堵したように穏やかな表情を見せた。

こうやって外出してどこかの店に入るのは、花音にとっては久しぶりのことだった。最後に入ったのは前回斎が一時帰国した時だから、もう半年前になる。

花音は基本的に外出するのは好きではなかった。正確に言うならば、人ごみや他人と接することが嫌いだった。だから花音は普段、独りで街中を出歩いたり、まして店に入ることなどしない。

それでも斎と二人でこうして出かけるのは嫌いではなかった。

何故かは分からない。

でも、彼といると不思議と落ち着く。人を見るとどうしても感じてしまう恐怖心も、彼がいると薄らぐ。まるで、彼に護られているかのような、そんな安心感がある。

斎は花音にとって両親と同じくらいに身近で頼れる存在だった。

物心つく頃には彼は常に側にいて、以来ずっと兄妹同然に育ってきた。両親の亡き今、彼はこの世界で最も信頼できる存在だといえるだろう。

真実、花音は誰よりも身近な彼を誰よりも信頼していた。

だが、最近、身近なはずの彼を遠くに感じることもある。

たとえば彼がイギリスにいて、物理的に離れているときであっても、

彼の存在を遠く感じたことなどなかったのに。

まあ、物理的に離れているとは言ってもその実、二、三日に一回はメールが送られてきたし、最低でも月に二回はイギリスで見繕った品が送られてきた。

とにかくイギリスにいても彼の気遣いはいつでも感じられた。だから、姿は見えなくても、彼がいつもすぐ側にいてくれているような、そんな気がしていた。

でも最近では、違う。こんなに近くにいるのに、手を伸ばせば触れられるほどの距離にいるのに、彼が遠い。

勿論今も彼は十分すぎる気遣いを見せてくれるし、優しくしてくれる。

でも、違うのだ。姿は隣にあっても、そこに彼はいない。手の届かないずっと遠くに彼を感じる。そんなことが多くなった。

斎は一体何処にいるの……？

胸の奥が疼く。

独り遠くに立つ彼が苦しそうで、傷だらけに見えて、そして、泣いているように思えて。

それなのに、彼が何も話してくれないことが、彼のために自分には何も出来ないことが、お前は無力だと言われているようで、辛くて、哀しかった。

「あら？ 陸上君？」

突然かけられた女の声で花音は現実に戻された。

声のした方を振り向けば、そこには二十歳前後と見受けられる二人の女性が立っていた。

斎の知り合いだろうか、と彼に視線を投じるも、名前を呼ばれた

当の本人は二人を見上げ、しかしその顔に覚えがないのか困惑の色を浮かべている。

「やつぱり陸上君よ、ほら」

「ホントだ！ 私たちのこと覚えてる？」

やや興奮気味の二人は順に名乗った後、小学校の同級生だと加えた。

小学校と聞いてようやく合点がいったらしい。斎はそこで隙のない笑みを見せた。

「久しぶり」「元気だった？」そんなありふれた挨拶が三人の間で交わされる。一般的などこでも見られる、昔の級友との再会の図だ。一通りの挨拶を終えると、一方の女性が花音を視界に留めて言った。

「その娘は？」

「もしかして……彼女、とか？」

「違うよ。従妹なんだ。八年ぶりに日本に帰ってきたら、驚くくらい街が変わっててね。それで、彼女に色々案内してもらってるんだよ」

そこはかとなく険のある口調で問うた二人だが、斎の返答を聞くなりどういっわけか嬉々とした表情を見せた。

こうして見ると、つくづく斎は身の処し方が上手いというのがわかる。

こうもさりと何の違和感もなく嘘をつけるとは。

それに、この女性二人の斎に対する態度は非常に友好的で好意的

だった。

そこから察するに、おそらく彼は己が鬼と呼ばれる一族の者だと悟られないように、完璧なまでに八方美人を演じていたのだろう。そうすることで他人に疑念を抱かせる余地を与えなかった。

関わりを避けようと他人を拒絶すればどうしても疑念を挟む余地を生んでしまうから。

それにしても、世の女というのは随分と口がよく動くものだ。

近くの大学に通っているのだ、授業がつまらないのだ、大学にはろくな男がいないのだ、そんな訊いてもいいことを次から次へと話し出す。

やがて自分たちのことを一通り話し終えたところで、二人のうちの一方が興味ありげに尋ねてきた。

「陸上君はどう？ アメリカの大学ってどんなかんじ？」

その間に花音は思わず斎を見やる。しかし斎はその間に疑問を見せることなく当たり障りのない受け答えを続けていた。

傍から見たら、斎は非の打ち所のない好印象の青年と映るだろう。たとえそれが虚偽と欺瞞によって作り出された偽りの姿だとしても、誰もそれを真実だと疑わない。

今彼が見せている笑みに温かさは無いのに。

穏やかな空気も優しい口調も、彼の周りにある壁を隠すためのカモフラージュに過ぎないのに。

彼らが知る陸上斎という人間の情報はそのほとんどが嘘によって上書きされたものなのに。

誰もそれに気付かない。

これは花音の推測であるが、おそらく斎はこの二人のことを覚え

てなどいない。

ただ、この場を穩便に纏めるために、さも覚えているかのように振舞っているだけ。

するとひたすら喋り続けていた二人が何の前触れもなく話題を変えた。

「ねえねえ、陸上君、鬼のことどう思う？」

「最近鬼が動き始めたって噂だね」

花音は氷の刃が突き刺さるような痛みと冷たさを感じた。

『鬼』という言葉が、聞きたくない呪いの言葉が、胸を抉る。

だが、背筋が凍るような悪寒の原因は、別にある。

花音が不安げに見つめる先　斎の眼が明らかに変わっていた。彼の纏う空気が冷たさを帯び、敵意を孕む。

「……興味ないね。鬼なんて所詮、妄想の産物だろう？」

言い切った斎の口調にそれまでの温厚さはなく、どこか棘を感じさせる冷ややかなものだった。

花音の目にはそれが恐ろしいほど冷徹なものへの変化と映っているのだが、一般人二人の目にはさほどの変化として映っていないらしい。期待したとおりの返答が斎から得られなかったことにやや不満そうにしている。

「魔女狩りって知ってるかい？」

そんな二人から視線を外すと、ティーカップを片手に斎は突如そ

う切り出した。

「中世ヨーロッパで実際に行われていた狂気的な大虐殺だ。莫迦げた迷信を根拠に、裁判という体裁の名の下、罪のない人間を『魔女』として次々と処刑していった狂信的殺戮。今でこそ魔女狩りは残虐で背德的な過ちであつたと一般的に認識されているわけだけれど…

…」

淀みなく淡々と述べ、そこで一旦言葉を切つて斎は二人を視界に止めた。

「この『魔女』と君たちの言う『鬼』って、何が違うのかな？」

言葉の文字面だけ見れば非常に穏健だ。しかし、その言葉の裏には確かに怒りと憎しみが宿っている。

二人に向けられる表情は柔和そのものだが、漆黒の双眸は冷冷とした常闇を髣髴とさせる。

疑問形をとつてはいるが、異論は許さないという威圧がそこにはあつた。

えもいわれぬ威圧に、二人はあきらかに返答に窮していた。

そして、どうしたものかとしばし逡巡したのち「それより」と新たな話題に打開を求めた。

「今日これからあいてるの？」

「よかつたら一緒にお花見行かない？」

「大岡川の桜がね、今見ごろなんだって」

賢明な判断だった。

話題の内容も咄嗟のことで他意はない。

だがそれは 地雷だった。

大岡川の、桜……

花音は今度こそ心臓を鷲掴みにされた感覚に襲われた。

恐怖が頭を支配する。視界が歪む。全身が冷たくて、指先の感覚がなくなつて。

血相を変えた斎が駆け寄ってくるのが気配でわかる。何かを言っているように思えるのだが、何も聞こえない。

聞こえるのは、すべてが燃え尽きる音。真っ赤に染まりながら崩れ去つてゆく音。

約束していた。でも、叶わなかった。あの約束は、燃え盛る真っ赤な業火にのまれて消えてしまったから。

呼びかけても反応のない花音の蒼白な面差しを覗き込み、斎は端正な面持ちを歪めた。

震える華奢な指に触れば、驚くほどに冷え切っている。斎は咄嗟に着ていたジャケットを脱いで花音の肩にかけた。

そして震える肩を抱き、そつと耳元で労わるように囁いた。

それは、小さな囁きだった。おそらく近くに立つ級友二人にも聞こえないであろう程の。

だがその言葉は花音を苛む真つ赤な音を一瞬で掻き消した。

懐かしい言葉。

温かくて、優しい言葉。

花音はおずおずと上目遣いに斎を見上げた。

「……行こう」

齋の言葉に小さく頷き、力の入らない指で、差し出された手を掴む。

「……どうかしたの？」

「大丈夫？」

何が起こったか状況を飲み込めずにいる二人は、それでも心配そうに声を掛ける。

そんな二人に齋は一瞥を投じた。

そのとき黒曜の瞳に宿っていた光は、もはや冷たいなどと呼べる代物ではなかった。

もつと恐ろしく身の毛のよだつような、息も出来なくなるほどの、
そう　殺意。

「彼女、調子が優れないんだ。悪いけど僕はこれで」

口早に言い捨てると、以後齋は言葉を加えることも振り返ることもしなかった。

覚束ない足取りの花音を気遣いながらカウンターに向かい、財布から無造作に一枚の五千円札を引っ張り出して伝票と共に店員の前に突き出す。

「Keep the change」

短く言い残すと、困惑顔の店員になど目もくれず、店を後にした。
今は釣銭を捨ててでも、一刻も早く、この場を去りたかった。

天城邸に戻るまで、花音は一言も口を開かなかった。斎もまた、同様に。

邸の門の前で花音を降ろしたところで斎は伏し目がちに謝罪を口にした。

「……ごめん。嫌な想いをさせて」

その謝罪の言葉に花音は即座に反応した。

「斎のせいじゃない」

彼が謝るのは筋違いだ。彼は何も悪くない。

だが彼はどうにも己を責めているらしい。表情を見れば分かる。だから、

「また、どこか一緒に行こう？」

だから、花音は淡く微笑んで見せた。

それがよほど想定外だったらしい。斎はしばらく驚きを隠せずにいたが、やがて決まり悪そうにしながらも表情を和らげた。

「……そうだね。また、どこか　そうだ、今度は薔薇園にでも行こうか」

「薔薇園……イギリス館の？」

「違うよ、本場のイギリスの。リージェンツ・パークっていうのがロンドンにあってね、その薔薇園が凄く綺麗なんだ。君ならきつと氣にいると思うよ」

そう言った斎の表情は幾分か明るかった。

イギリスの話をする時の斎はいつもとても楽しそうだと花音は思う。よほどイギリスが気に入っているのだろう。

彼の好きな国。有名な薔薇園。飛行機に乗るのは嫌だけれど、でも、一度くらいは行って見たいと思う。

花音は頷きかけて、しかしそこで、バイクに跨ったまま降りようとしないうちに首を傾げた。

「どこか行くの？」

「ああ、ちよつとね。会う約束をしてる人がいるんだ」

さりげなく視線を逸らす斎。

会う約束？ 誰と？

しかしそれを花音が問いかけることはなかった。

訊いてはいけない 本能がそう訴えかけていた。

「……これ、ありがとう」

エンジンに手をかけた斎に、花音はジャケットを差し出した。

日が傾きかけているせいか、段々と風が冷たくなってきている。

彼のジャケットのおかげでバイクに乗っていても寒さを感じずにいられたが、その分彼は寒い思いをしたのではないだろうか。ただでさえ、バイクのライダーは風を全身で受けるのだ。

今更のようにそう思えてきて、申し訳ない気分になる。

しかし斎はジャケットを受け取ると案ずるような表情を見せた。

「もう家の中に入ったほうがいいよ。冷えるといけないから」

ある意味予想通りの言葉だった。

本当に彼はいつもいつも私のことばかり。^{ひと}

花音は苦笑交じりに小さく頷いた。だが頷いたもののその場を動こうとはしない。

せめて見送りくらいはちゃんと……。

その意図を読んだのか、彼は心なしに素早く準備を整えエンジンをかける。

「すぐ戻るから」

そう言って軽く手を挙げると、斎はバイクを発進させた。

そのとき花音の中で何かが疼いた。

苦しいほどに胸を締め付けられるような感覚。

……そう、この感覚だ。

遠ざかって行く背中を見送りながら、花音はこみ上げる不安と寂寥感に苛まれていた。

また、遠くへ行ってしまう。

独りで、誰にも頼らずに。

声も届かない、遥か遠くへ。

どれだけ走っても追いつかない。

どれだけ叫んでも振り返ってはくれない。

彼は優しい。彼の気遣いも嬉しい。

でもそれは、同時に悲しくもあった。

いつも自分は助けられてばかり。いつも護られてばかり。自分だって彼の力になりたい。助けになりたい。

傍で、支えになりたいのに……。

しかしその儚い想いが、もはや見えなくなった背中に届くことはなかった。

第拾伍章 桜の約束

『導きは 漆黒翔る 白雪なりて 花の傍らで 汝を待たん』

白地に菖蒲の花が咲き誇る着物を纏い、椿はそつと息を吐いた。

「もう…後には引けませんの。あの方のためにも、一族のためにも」
空を見上げれば、燃えるような赤が空を染めていた。あと数刻で
客人が訪れる。大切なものを守る為に。椿のもとに。

「雪玲、彰人と朔真に伝えてくださいませ。貴方方も含めて、私が
良いと言つまでこちらに来ないようにと。これは当主としての命令
です」

『かしこまりました姫君。御身のお心のままに』
闇が近づいてくる。

＊

数刻後、椿は近づいてくる足音を聞きつけるとそつと息を吐いた。

『姫君、お連れいたしました』

「ありがとうございます」

雪玲の呼びかけに応えると、雪玲は一目し、その場を離れる。

「…」

招かれた客人は一言も発さずにその様子を見、椿を見つめた。表情には出さないもののその瞳には強い感情が燃えていた。

「こうして直接会い間見えるのは初めてですね。お初にお目にか
かります。私、南雲家当主の南雲椿と申します」

やわらかな笑みを浮かべ、微笑む椿。だが、依然として客人は表情を変えない。

「申し遅れました、と申します。この度はお招きに預かり光
栄です」

丁寧で穏やかな響きを含んだ声、彼の名前は風に掻き消され椿の

耳にしか入らなかった。

「お噂は聞いております。家のものがお世話になったそうで」

「前置きは結構ですよ。恐縮ではありますが、こちらも長居はできませんので早速本題に入らせて頂きたいのですが……？」

にこやかに言葉を進める椿をやりわりと遮る青年。穏やかで丁寧すぎるような口調が、彼の存在を浮き立たせる。

「そうですね。もっとお話したかったです、残念ですわ。取引とは？」

残念そうにしつつ、呑み込む様な気迫で椿は問う。

「もう既にお察しでしょうに……。先日、同朋が回収したこの『指輪』、あなた方にお返し致します」

そう言い、彼は袖を捲った。華奢な鎖が繋ぐ一对の白銀、南雲の宝『誓いの指輪』がそこに輝いていた。彼は、それをちらつかせながら言葉を続けた。

「勿論、無償で、とはいきませんが、こちらの提示する条件を呑んで頂けるならば、確にお返し致します。僕の望みを叶えてくれるなら、ですがね」

「……望みとは？」

静かに尋ねる椿。その瞳には何の色も浮かんでいない。

「彼女に、城崎花音には手を出すな。僕が対価として要求するのはそれだけです。今後いかなる事態に陥ろうとも、彼女には指一本触れないと約束して頂きたい。……如何です、あなた方にとって悪い条件ではないでしょうか？」

彼は、陸上斎は、静かにけれども力強く言った。肌で感じる気迫は一般人であれば当の昔に気を失っているほど深かった。

椿は悲しそうに微笑んだ。斎の花音を守ろうとする強い意思を見て、自身には無いものを見るかのように。

「その方が大切ですね。宝を捨てても守りたいほどに。羨ましい、私も」

『なあ、お前名前は？』

『約束だぞ！ 必ず』

椿の脳裏に誰かの言葉が響いた。桜が柔らかに舞い散る中、あの子は笑っていた。

「！」

言葉を紡いだはずの口から出たのは、音の無い空気だけ。何かを忘れている、椿がそう感じた瞬間、その記憶は真っ白に塗りつぶされていく。

「……？ どうかされましたか？」

斎の呼び声で椿は覚醒した。頭がぼんやりとして、先ほどまで何を考えていたか分からなくなってしまうていた。

「……取引の話でしたわね？ 良いでしょう。元より私もなるべく争いたくないんですの。争いは、悲しみを生むだけですから」

「それは……殊勝な貴意ですね……。まあ、あなた方の真意がどこにあると、取引に応じてさえ下されば、こちらとしてはこれ以上申し上げることはありません。……では、この度の取引、御快諾頂けたと受け取ってよろしいですね？」

確認を取ると、斎は彼女に『指輪』を渡した。そして、用は済んだと言わんばかりにその場を後にしようとする。

「お待ちくださいな。我が家の桜をじっくりとごらんいただきませんか？」

椿は背後の桜を示し、自慢げに微笑む。彼女が引き止めるのも無理も無いほど、桜は美しく、艶やかであった。だが、斎は先ほどから一瞥もしていなかったのだ。

「桜、ですか？ 頂いた手紙にもそうありましたが……そんなもの一体何処にあるんです？」

怪訝そうに言う斎。そう、見えるはずが無いのだ。南雲の桜は、南雲家の人間にしか見えないのだから。

「そう、貴方には見えないんですのね。天城に連なる者でしたら見えると思ったのに残念ですわ」

悲しそうに話す椿。その清楚で柔らかな面影には既に当主として

の顔は消えていた。

「僕にはなんのことだか。それに、生憎僕は桜は嫌いでしたね。…
どうやら無駄話が過ぎたようです。それでは、僕はこれにて失礼さ
せて頂きます。…くれぐれも反故になさらぬよう…」

その言葉を最後に斎は姿を消した。

「まあ、冷たい。取引した以上、狐さんには手を出しませんわ。こ
ちらからは」

風に靡く無数の花びらが椿の表情を隠す。一瞬見えたその顔には、
酷く冷たい色が浮かんでいるようにも、今にも泣き出しそうな寂し
げな色が浮かんでいるようにも見えた。

第拾陸章 慟哭の凍月

あの日、あの時、確かに誓った。
泣き崩れ、震える小さな身体を、この両腕に抱いて。
たとえ何を犠牲にしたとしても、必ず。

*

磨きぬかれた漆黒の刀身が灰白い月光を弾いた。
さながら鏡の如くその身に月を映し出す黒太刀を、陰を宿した黒曜の瞳が射抜くように見つめている。

やがて小さく息を吐くと、飛鳥は太刀を鞘に収めた。
この『月影』を手にしてからというもの、幾度となくこうして対話を試みているのだが、どこまでもこの剣は素直に従ってくれる気はないらしい。まさかこいつがここまで強情だとは……。

《お疲れの様子ですね》

やや憔悴気味の背中に、労わるような声がかかった。
振り返れば、いつからそこに控えていたのか、開け放たれた障子戸の影に畏まって端座する炎珠の姿があった。

《何事も一朝一夕に成しえるものではありません。互いに歩み寄り対話を重ねればこそ、双方に理解も得られましょう》
「だがこうも煩いやつだと俺の身が持たない」

独り言のように漏らす若き当主に、炎珠は小さく笑みを零したように見えた。

それを感じ取った飛鳥はついと炎珠から視線を逸らした。

「何の用だ？」

《……大変申し上げにくいのですが、実は、若様に至急ご報告申し上げますねばならないことがあって参りました》

一変して緊張感に満ちた炎珠の口調に、飛鳥は精悍な面持ちに一層の剣呑を乗せた。

*

南雲との取引は無事に相成った。

冷たい月明かりが不敵な笑みを冴え冴えと照らし出した。

七つある宝のうち六つの封印が解かれた今、残る一つの宝を巡って両家の対立が激化するのには必至。そうなれば、手段を問わない乱戦に発展することはもはや時間の問題だろう。

ならば、目下に迫ったその避けられぬ戦闘を前に自分がなすべきことはただ一つのみ。

そしてそれは南雲家当主の英断によって成就した。

これで、戦いの準備は整った。これで、心置きなく戦える。

先刻見えた少女の姿を脳裏に描き出し、端正な面持ちに満足げな

微笑を湛える。

はじめて見えた南雲の当主は、想像いていた通りの人物だった。年は花音よりも下と見受けられるほどの少女だった。その若さゆえか、時折危うさを覗かせることもあったが、しかし当主としての自覚と自負、威厳をしっかりと持ち合わせていた。そして何よりも、物事の分別を弁え、采配の揮い方を心得ていた。

本当に、同じ当主でも天と地ほどの差だ……。

軽蔑の色を黒曜の瞳に乗せた時だった。

《やってくれたな、ループス……！》

突如、背後に怒りに満ちた靈気が現れた。

まったく、本当に早いな……。

内心で嘆息交じりに感嘆しつつも、氷のごとく凍てつく月をバツクに悠然と構え、斎はそ知らぬ顔で嘯いて見せた。

「何のことだい？」

《惚けるな！ 我等に隠し立てが通じるとでも思っているのか！》

爆発寸前に荒れ狂う靈気と共に激しい怒号が飛ぶ。

《貴様、己のしたことが分かっているのか！？》

圧倒するような靈気を放つ黒猫を流し目で捕らえ、斎は面白そうに目を細めた。

黒猫はよほど激昂しているらしい。その姿はもはや『猫』と呼ばれるには遠くかけ離れていた。

人間を凌ぐ巨大な体躯に、鈍い光を放つ鋭い牙と爪。

それは言つなれば 黒獅子。

はじめて目の当たりにするその本性に興味こそ示したものの、しかし黒獅子の放つ靈氣に応えた様子もなければ悪びれた様子もなく、斎はあっけらかんとして罪過を自白した。

「必要ないだろう、アレは？ 僕達にはアレの力を引き出すことは出来ない。なら、持っていてても無意味だ」

《僭越ながら、斎様。我々には力を引き出すことができずとも、南雲にその力を引き出すことが出来るというのであれば尚更、それを阻止するために我等の下に置いておくことに意義は十分にあるのではありませんか》

意見の声は水羅だった。

声を荒げるでもなく声音は静かなままだが、的を射た指摘は確かに強い非難を物語っている。

「……ああ、そういう見方もあったな。気付かなかったよ」

《嘘おっしやい！ 宝の扱いは戦術を練る上での中核！ それを等閑視するなんてありえませんわ！ そんな見苦しい嘘が通用するとも思つて！？》

「生憎、君たちが思っているほど僕は優秀じゃないんでね。以後気をつけるよ」

雷毘の追及も軽く受け流し、斎は尚も白々しいまでの単調な受け答えを貫く。

その態度が黒獅子の神経を逆撫でた。

《ふざけるなよ、ループス!!》

怒気に満ちた一喝に空気が振動する。

《事は重大なのだぞ！ 南雲なぐもに宝を譲り渡すなど……！ そんな愚行に出た輩はこの千年見ても貴様が初めてだ！ 貴様は天城あまぎが培ってきたこの千年の礎を》
「くだらない」

怒りで熱のこもった弄舌を皆まで聞かず、侮蔑を含んだ冷ややかな一言が一蹴した。

「使命だの伝統だの、そんなものにいつまでも固執してるから千年たっても尚その因縁を断ち切れずにいるんだろぅが」

斎の相貌に浮かんでいるのはそれまでの嘲笑とは打って変わった冷笑。

「千年の天城の苦悩？ そんなもの僕には関係ないね。そもそもこれは天城が自ら選んだ運命みちだろぅ。それを僕に押し付けるな」
《貴様……！》

斎が吐き捨てた暴言に、黒獅子のみならず、居合わせた他の守護獣までもが息を呑んだ。

言葉を失う守護獣たちに冷眼を向け、斎はその面に嗤笑の色を乗せた。

「でもまあ、これで大分面白くなっただろ？ ゲームは観戦する分には拮抗しているのが理想だが、自分が当事者である場合には劣勢

の方が楽しみ甲斐がある。苦境をいかにして打開するか……そのために持てる知識を駆使し知略をめぐらせ血路を作出することこそがゲームの醍醐味であり真髓だ」

あまりに場違いな発言に、守護獣たちは思わず己らが耳を疑った。

《ゲームだと……？ これは遊びではないのだぞ！？》

突飛のなさに困惑を示しつつも、黒獅子は聞き捨てならない縦言を咎め立てる。

だが斎はその糾弾をきっぱりと跳ね除けた。

「いいや、僕にとってはただのゲームさ。天城と南雲というプレイヤーが七つの宝を奪い合うだけの、戦略も論理もない極めて単純明快で幼稚なゲーム」

澁みなく言い切り、斎は意味ありげに探るような視線を守護獣に向けた。

「お前たちだって同じだろ？」

《何を……！ 貴様、我等を愚弄する気か！》

即座に反言する黒獅子に、水羅と雷毘も口々に追従する。
間髪空けずになされる必死の抗弁に、斎の周囲で風が唸った。

「違うと言うか？ 違うと言えるのか？ 天城に連なる者をただの駒としてしか見ていないお前たちが！」

感情のままに声を荒げ、冷たい憎しみを湛えた双眸で守護獣を射抜く。

憤怒に塗れた斎の靈力に呼応するかのように、背後の凍て月が大きく揺らめいた。

「お前たちが僕に……僕達にしたこと、忘れたとは言わせないぞ」

低く低く発せられた言葉。

その言葉を聞くなり、守護獣たちは、あの黒獅子までもが一切口を噤んだ。

「謀反で捕らえたかったら捕らえればいい。好きにしろよ」

居丈高に言い捨てる斎。だが守護獣たちの中に誰一人として動くとする者はいない。

沈黙が斎と守護獣の間に横たわる。

「どうした？ 僕を断罪するんじゃないかったのか？」

微動だにしない守護獣三匹を一睨し、斎は不遜に促迫する。

しかしそれに応えたのはいずれの守護獣でもなく、背後の暗がりから響いた少年の声だった。

「もういい、下がれ」

その声に心臓が強く脈打った。

斎は暗闇の中に認めた声の主に、これ以上ないほどの淡白な視線を投じた。

そこにあつたのは、闇を髣髴とさせる漆黒の髪。深淵に誘うかのような黒曜の瞳。

顔を合わせるのは何時以来だろうか。

だが、久方ぶりの顔合わせにもかかわらず、その人物を特定することに時間は要さなかった。白状すると、今の今まで彼の顔など記憶の片隅にも残っていなかった。それでも、特定に迷いはなかった。見紛うはずがない。判断を誤るはずがない。いくら記憶や意識が否定しようとも、本能が告げてくる。

「……やあ、久しぶりだね。いや、『始めまして』の方がしっくりくるかな……若様？」

彼が天城家の当主である、と。

*

チクシヨウチクシヨウチクシヨウチクシヨウ……！

土煙を巻き上げ、荒れ狂うようなエンジン音が閑散とした山道を疾走する。

差し掛かったカーブにも減速することなく、行く手に迫る障害物を回避することもせず、ただ猛る呻りをあげながらひたすらに突き進む。

メータの針は既に百キロ付近を指している。しかし尚も、紺の巨体はスピードを上げた。もはや暴走に等しい機体を駆り、倅介は単身南雲低を目指していた。目的は勿論、力づくでも宝を奪い返すため。

『指輪』が南雲の手に渡った。

今しがた伝えられた緊急通達。それは、本来あつてはならない報告だった。許されないはずの事態だった。

一度我が物としたはずの宝が南雲の手に渡るなど。いや、そんなことはどうでもいい。

宝が南雲に渡ったという事実そのものは大した問題ではない。真に重要なのは、問題視しなければならないのは、このような事態に至った経緯。この事態を引き起こした原因。

即ち 陸上斎の謀反。

淡々と伝えられたその言葉を、倅介は幾度も脳裏で反芻する。

……謀反。その言葉の意味くらい解る。確かに、天城が手にした宝を勝手な一存で敵である南雲に引き渡すという行為は紛れもない背信行為だ。謀反といわれて然るべきだろう。だが……。

「……何でだよ、何でお前が……！」

その行為と斎とを結びつけることがどうしてもできなかった。

否、結びつけることを、これが彼のなしたる業であることをどうしても認めたくなかった。

バイクのグリップを握る手に力がこもる。

彼が天城に対してよい感情を抱いていないことは知っていた。憚らずに言うならば、彼が天城を憎んでいたことも知っている。だが、まさか彼がこのような暴挙に出るとは思ってもしなかったのだ。

七宝は神器だ。その扱いには決して侵してはならない絶対の領域がある。それを、私情に駆られてその境界を越えるなど、彼に限ってするはずがない、と。

なんだかんだ言いつつ、倅介は斎のことを深く信頼していた。

だから、必要な時には必ず彼の判断と指示を仰いできた。その度に向けられる嫌味全開の言動は非常に癪に障るし、まるで彼に敵わないという現実は何しくもあつたが、それでも一応自分の能力は自覚している倅介である。故に斎はいざというときに頼るべき最後の拠り所だつた。

全ては、彼が判断を誤ることなどないという、確信と信頼があつたから。

しかしその確信は無惨にも崩壊した。信頼は呆気なく裏切られた。だが今倅介を支配しているのは、裏切りに対する怒りでも、まして悲しみでもなく。

何で気付かなかつたんだよ……。

自分自身に対する悔いと憤りだつた。

彼がこのような行為に出ることを微塵も察することが出来なかつたことに対する、そして彼を止めることが出来なかつたということに対する、自責と悔恨の念。

アイツの闇を知ってるのは、俺だけなのに……！

何故気付いてやれなかつたのか。少し冷静に考えれば、彼がこのような行動に及ぶことは想定できたのに。

それなのに、勝手に『陸上斎』という像を創りあげ、多少の差異は見えて見ぬ振りをして、彼の全てをその像に押し込んできた。

帰国して後の彼は明らかに様子が違った。その変化が顕著に現れるほど、それほどに彼は己を追い込んでいた。おそらくは、彼自身でも気付かない内に。

「……チクショウツ!!」

倅介は感情のままに吐き捨てた。

その時、視界の隅を何かが掠めた。

次の瞬間。ヘッドライトが照らす行く手に突如一つの影が飛び込んできた。それは、紛れもなく 人。

倅介は反射的にブレーキをかけた。

悲鳴にも似たブレーキ音が空気を裂き、舞い上がった土埃が視界を覆う。

即座に反応したとはいえ、時速百キロを超えるバイクはそう簡単には止まらない。辛うじて停止したのは、突如現れた人影の一メートルほど手前だった。

「つぶねーだろ、バカヤロウ!!」

バイクが完全停止するが早いか、倅介は怒声を張り上げた。

確かに道路に急に飛び出す方にも十分非はあるが、百キロオーバーという完全なる法定速度違反の猛スピードでバイクを飛ばしていた倅介にはそれ以上に非があることは誰の目にも明らかだ。

が、自分に非があるなどとは微塵も感じていない倅介は一方的に相手の非を責め立てる。

ちなみにどうでもいい余談だが、あの高速走行下での急ブレーキにもかかわらず、体勢を保ったまま急停止させられる倅介の運転スキルは実は拍手ものだったりする。

「テメエ、どこに目えつけて」

更に文句をつなげようとして、しかし倅介はそこで言葉を切った。土煙の中から現れた人物。その顔に、倅介は確かに見覚えがあった。

「……テメエは……南雲の……」

癖のある肩丈の黒髪。闊達そうな容貌は少女というよりは女性と評した方が適當だろう。

「随分とガサツな運転ね。まあ、見た目どおりだけど」

乱れた髪を掻き揚げ、臆することなく感想を述べる女性。確かに名を美夜といった。を正面から睥睨し、倅介は剣呑に言葉を投げた。

「テメエこんなところで何してやる？」

「それはこっちの台詞よ。あんたこそここに何しに來たわけ？　ここから先は南雲の私有地なんだけど？」

とても初対面の人間にするものとは思えないドスの効いた挨拶をした倅介を前に、しかし流石に時速百キロで馳突するバイクの前に飛び出してくるだけの肝っ玉を持っているだけあって、美夜はその程度の威嚇などまるで意に介してないらしい。萎縮するどころか相応に高圧的な言葉が返ってきた。

しかしその常套句じみた中身といに、倅介は尊大に構える。

「訊かなきゃわかんねえのかよ？　宝を返して貰いに來たに決まってるんだろ」

「それで独りで敵陣に乗り込んできたわけ？」

言葉の端に馬鹿にしたような響きを乗せ、美夜は挑発的な視線を倅介に向ける。

対して倅介もまた、同様の視線を美夜に向けた。

「小細工は嫌いなんだな。正々堂々真つ向勝負で奪い返させて貰うぜ」

腕っ節には自信がある。更には、相手が女子供だからといって手加減するような生易しい精神を倅介は持ち合わせていない。

「なんなら、手始めにデメエをこの場でのして見せてやろうか？」

女相手では物足りないが、ウォーミングアップくらいにはなるだろう。

倅介の気迫からそれが冗談でないことを察した美夜は肩を竦めて見せた。

「せつかくだけど遠慮しておくわ。あたしは別にあんたとやりあいに来たんじゃないのよ」

「ああ!？」

美夜の口をついて出てきた拍子抜け甚だしい言葉に、倅介は不信感と不機嫌さを露わにした。

「やりあう気がねえのにわざわざ何しに出て来たんだよ!？ つーか、用がねえんなら引つ込んでろ!」

「用がないとは言つてないでしょ」

「じゃあデメエの要件をさっさと見えよ! 俺は家臣^{デメエ}に用はねえんだからよ!」

「本当、横柄な男ね。……でも、本題に入る前に一つ答えて。そこまでして、どうして宝を欲するの？ 何のために宝が必要なの？」

思いもしない問いかけに、倅介は咄嗟に返答できずに口籠った。いざ何故かと問われると、適切な返答に悩む。

強いて一つを挙げるとすれば、七宝を全て回収しろというのが天城家当主の命令だから、ということになるだろうか。だがその根底には天城が全ての七宝を手になければならない事情があり、そのためには南雲に七宝を渡すわけにはいかないというのも理由の一つなのであつて……。体裁上の理由は幾つも存在する。

だが天城として宝を欲する理由と、今倅介が宝を欲している理由は別だ。

「んなもん、必要だから必要なんだよ！ それ以上に理由があるか！」

我ながら馬鹿丸出しの回答だと思う。

だが、かといって、今宝を欲しているところの理由を素直に彼女に答える義理はない。

だがその返答に、意外にも美夜は気分を害した様子を見せなかった。

「……そう。つてことは、あんたも大して七宝そのものに執着はないってことね」

呟くようなその台詞に、倅介は眉根を寄せる。

……あんた『も』？

「なら都合がいいわ。……ねえ、取引しない？」

これには今度こそ倅介は絶句した。

……取引？ 敵同士の天城と南雲が？

「取引に応じるなら、南雲が持つてる『盾』をあんたに譲ってあげる」

願ってもない申し出に、倅介の表情が一変した。

「ほー、いいのかよ？ 宝をそんな易々俺らに渡して？」

「あたしの要求を呑んでくれるなら、それくらい構わないわ」

「……『それくらい』ねえ……？」

宝を取引の対象とするなど、当主の許可を受けたものとは到底思えない。これは彼女の独断による取引だ。

だが、それが南雲の意志だろうが彼女個人の意志だろうがそんなことはどうだっていい。

すすんで宝を譲り渡してくれるというのだ。これを無下にする理由を見つける方が難しい。

「で？ テメエの要求ってのは何だよ？ 基本的になんだってくれやるぜ？ まあ、今俺らが持つてる宝全てよこせとか、うちの大将の首持つてこいとかいう要求には流石に応じられねえけどな」

今宝が手に入るならどんな対価だって払ってやる。それは倅介の本心だった。

ひとまずは一つでも宝を奪い返すことが出来るならそれでいい。とりあえず一つでも取り返せれば、斎の謀反に対する恩赦を啓上することができる。

倅介の言い様に、美夜は呆れたように嘆息した。

「そんなヤボな要求はしないわよ」

すると、それまでの勝気な面持ちに影が差した。

「あたしは七宝なんていない」

顔を伏せる美夜。

そして、一息の間を置いて、細く言い放った。

「だから『七宝』を……全て壊して それが、あたしが対価
として要求する望みよ」

＊

長らく封じてきた感情がある。心の奥底にある扉の中で長く眠り
続けていた感情がある。

それが今、長い眠りから醒めた 。

斎ははじめて間近に見る天城家当主の顔を、底冷えするような黒
曜の瞳に映した。

年齢不相応に落ち着き払い、実年齢よりもはるかに大人びた印象
を与える容貌。それはまるで感情の類を感じさせない。若さの上に
精悍さを宿した端整なその容貌を見れば見るほど 、

つくづく可愛げのない餓鬼だな……。

眠りから醒めたばかりの感情が扉の奥で暴れだす。閉ざされた扉を抉じ開けようと扉を叩く。

闇夜に浮かぶ白銀の月が不気味に輝く。

守護獣らが皆下がり、二人きりとなった部屋を重苦しい空気が支配していた。

それを先に破ったのは飛鳥だった。

「何故『指輪』を南雲に渡した、ループス」

その物言いに、斎は我知らず眉を顰めた。

客観的に見れば、飛鳥のそれは当主として当然の口調だった。だが、それは斎の中で蠢く感情を確かに刺激した。

「さあ……？ 単なる気紛れかな」

一層激しさを増すその激情を押さえ込むようにして、斎はあえてわざとらしいまでに剽軽に応じた。

「対価として何を要求した」

「別に、何も」

まるで真摯に取り合おうとしない斎の姿勢に、飛鳥は苦渋の表情を見せた。

これでは何を問い質したところでまともな回答など得られないと推察し、それきり飛鳥は口を閉ざす。

品定めでもするかのように飛鳥の出方を窺っていた斎は、存外早

くに賢明な判断に至ったことに内心で冷罵まじりの称賛を送った。
事実斎は何を詰問されたところで何も答えるつもりはなかった。
答えることで自分が得られるメリットはない。ならばわざわざ素直
に答えてやる必要も義理もない。

……それにしても。

このすかした態度。お上気取りの口調。

何様のつもりだよ。

斎は年下の当主を睨めつけるように疾視した。

あの髪の色も目の色も。

何もかもが気にいらない。

心の底に渦巻く激しい怨嗟と憎悪の情。

隙あらば扉をぶち破ろうと虎視眈々と機を狙うそれを辛うじて抑
えているのは、たった一つの小さな鍵。

この取引は、お前のためでもあるんだぞ、天城飛鳥……。

もしもその鍵を失えばたちまち扉は破られ、長い間押さえつけら
れてきた激情はその反動で暴走する。

そして必ず。

何よりも先に、お前を殺す。

決して忘れない。

天城によつて全てを奪われたことを。

何もかもを奪われた。

あらゆるものを、生きる希望さえ奪われた自分にたった一つ残された希望の光。それは、一人のあどけない少女　そう、それこそが花音だった。

花音はよく笑う娘だった。眩しいほどの笑顔をいつも絶やさない、純真で明るい少女だった。

澄み渡る蒼穹の如く清らかで、万物を照らす白日の如く暖かで、凜と咲き誇る常初花の如く愛しく可憐で……。

それは、すべてを失い、生きる価値を失った自分にとって唯一の希望の導だった。

なのに、あの日、それすらも奪われた。

全てを飲み込み、無情に燃え盛る紅蓮の炎。

希望の一輪は無慈悲で理不尽な業火に吞まれた。

血の色と同じ烈火は何の罪もない無垢な花を無惨に灰燼とした。

闇にも等しい黒煙は蒼天を覆い隠し、日輪を包み込みその温もりを掻き消した。

忌まわしい煉獄の炎は全てを焼き尽くすだけ焼き尽くし、やがて跡形もなく消え去った。

しかし炎火は消えても、そこに再び花が芽吹く事はなかった。天を覆う黒雲は晴れず、未だ陽光を阻んでいる。

もしももう一度、あの愛しい花を愛でることが出来るのならば、清しい天穹の下、暖かく目映い陽の光を浴びて輝くあの花を慈しむことができるのならば、そのためにどんなことだってしよう。どんな犠牲をも払おう。

反逆者となりはてようと、罪人に身を落とそうとも構わない。肅清でも拷問でも、いかなる責め苦にも耐え抜いて見せる。

たとえこの手を血で染めることになったとしても。この身がどれほど血に塗れようと。

彼女を護るためならば。もう一度、彼女があ頃のように笑ってくれるのならば。

必要とあらば、どんな殺戮も躊躇わずに完遂して見せよう。

彼女に勝る価値を有するものなど、この世界の何処にも存在しない。彼女の代わりになるものなどありえるはずもない。万の命を以つてしても彼女の命の前には無に等しい。

そのために地獄に落ちるとしても、喜んでそれを受け入れよう。

花音さえいれば、他には何もいらぬ。何も望まない。

彼女のためならば、この命だって惜しむものか。

不条理な猛火が花音から両親を奪ったあの日。花音からあの笑顔を奪ったあの時。確かに誓ったのだ。

灼熱の炎を前に泣き崩れ、震える彼女の小さな小さな身体を、この両腕にしかと抱いて。

たとえ何を犠牲にしたとしても必ず、この命に代えてでも必ず、花音だけは守り抜いてみせる、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2995n/>

いつわりの仮面（ペルソナ）

2011年12月31日16時59分発行